令和5年度

年報

独立行政法人国立美術館

Independent Administrative Institution National Museum of Art

ANNUAL REPORT 2023

2023

目次 CONTENTS

1　総論　2

2　主要記事　3

3　特徴的な取組　4

4　展覧会活動
- 4-1　所蔵作品展　12
- 4-2　企画展　16
- 4-3　映画上映等　23
- 4-4　巡回展　25
- 4-5　美術創造活動の活性化の推進　27

5　美術情報の収集・発信活動
- 5-1　情報資源発信に向けた取組　28
- 5-2　美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供　29
- 5-3　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現代作家の国際発信支援等　32

6　教育普及活動
- 6-1　幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）及びラーニングコンテンツ等の開発　33
- 6-2　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等　33

7　調査研究活動
- 7-1　調査研究一覧　35
- 7-2　調査研究成果の発信　36

8　コレクションの形成・活用・継承
- 8-1　作品の収集　38
- 8-2　所蔵作品の修理・修復　45
- 8-3　所蔵作品の貸与　45

9　ナショナルセンターとしての活動
- 9-1　国内外の美術館等との連携・協力等　46
- 9-2　美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施　48
- 9-3　キュレーター研修、インターンシップ、博物館実習　48
- 9-4　アートカード・セット　48

10 決算報告　49

11 会員制度等　50

12 名簿　51

1

総 論

令和５年度は第５期中期目標期間の３年目であり、中期計画及び年度計画に沿って所定の事業を実施した。

1　美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

各館において多彩なジャンルをテーマとした展覧会を開催した。所蔵作品展においては、各館とも、調査研究の成果に基づき、季節に合わせた作品選定、企画展と連動したテーマ展示など時宜をとらえた企画を多く開催した。企画展においては、世界の美術の新たな動向を紹介する展覧会や我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会、メディアアート等の先端的な展覧会、作家・作品の再発見、再評価、我が国に所在するコレクションの積極的活用を目指した展覧会など、意欲的な取組を行った。主要なものとしては、棟方の世界的受容や業績を検証するとともに、木版画の代表作、肉筆襖絵、本の装丁、映像メディア、商業デザインまでを含む広範な分野を一堂に集めた大回顧展「生誕120年　棟方志功展　メイキング・オブ・ムナカタ」(東京国立近代美術館)、皇居三の丸尚蔵館の収蔵品を通じて、皇室と石川とのつながりを紹介し、皇室文化に親しんでいただくことを主眼とした「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川―麗しき美の煌めき―」(国立工芸館)、かつての「現代美術の動向」展出品作を中心に66作家で構成し、これまで紹介される機会の少なかった作家や作品を積極的に取り上げた「開館60周年記念　Re: スタートライン 1963-1970/2023　現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」(京都国立近代美術館)、19世紀後半から20世紀初めに日欧の画家が描いた仏ブルターニュ地方を主題とする作品約160点を一堂に集め、近代美術と同地の関係を多角的に検証した「憧憬の地　ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」(国立西洋美術館)、国内及び世界各国で活躍する現代美術作家を「ホーム」の表象というテーマに基づいて選定、構成した「ホーム・スイート・ホーム」(国立国際美術館)、西洋美術において普遍的な題材の一つである「愛」をテーマに、ルーヴル美術館の所蔵品から「愛」と関連づけて解釈できる絵画73点を選出し、テーマ・時代によって分類し紹介した「ルーヴル美術館展　愛を描く」(国立新美術館)等が挙げられる。

国立映画アーカイブにおいては、映画上映会・展覧会を開催した。主要なものとしては、東京国立近代美術館が1968年に「返還映画」を冠した特集上映を組んで以来、55年ぶりの開催となった上映会「返還映画コレクション(1)――第一次・劇映画篇」等が挙げられる。

国立美術館巡回展は東京国立近代美術館が担当し、２会場で開催したほか、国立映画アーカイブの優秀映画鑑賞推進事業は、101会場において実施した。

教育普及活動においては、オンラインコンテンツを充実させつつ、対面での展覧会解説、レクチャー、子どものためのワークショップや、令和５年度は美術館の仕事体験、講義形式の長期ワークショップ等新たな試みを実施し、多彩なプログラムを展開した。国立アートリサーチセンターでは、各館の教育普及活動を紹介する動画の作成や、主に発達障害のある方とその家族に向けた館別ソーシャルストーリーの作成などの事業を実施した。

また、日本の芸術創造活動活性化のため、国立新美術館において我が国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供を行ったほか、美術に関する情報の拠点としての機能向上のため、「全国美術館収蔵品サーチ」の運用や、我が国初の日英二か国語の美術家オンライン事典である「日本アーティスト事典」の新規公開を行うとともに、所蔵作品等のデジタル化・データベース化等を進めた。

そのほか、来館者に向けて、多言語による各種案内、入場料金・開館時間等の弾力化、ミュージアムショップ・レストラン等の充実など、快適な観覧環境を提供するための様々な取組を継続的に行っている。

2　コレクションの形成・活用・継承

国立美術館の役割を踏まえた質の高いナショナルコレクションの形成を図るため、法人全体の作品収集方針等に基づき、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実に努めた。また、現代の美術動向を示す作品の同時代収集を進めた。

保存修復事業としては、各館で緊急に処置を必要とする作品について重点的に修理・修復を行うとともに、国立アートリサーチセンターにおいては東京文化財研究所との共催により、海外から先駆的な知識・技術をもつ講師を招へいし、専門家向けのワークショップを開催することによって国内の保存修復技術の向上をはかった。

そのほか、国立美術館相互の貸与を推進しつつ、国内外の美術館等へ所蔵作品を貸与する際、所蔵作品の展示計画、作品保存等に配慮しながら可能な限り積極的に取り組んだ。

3　ナショナルセンターとしての活動

18年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を４年ぶりに関西で開催したほか、インターンシップ、キュレーター研修、博物館実習などを通じて人材育成に取り組んだ。

また、国立アートリサーチセンターにおいては、国内外の美術館等との連携・協力の下、国内外の美術館等との連携・協力の下、シンポジウムやワークショップの開催、国立美術館のコレクションを活用した「国立美術館 コレクション・プラス」プレ事業の実施、「全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」の運営、国立美術館研究員を含む日本の美術専門家を海外派遣することによる現地の専門家とのネットワーク構築、ミュージアム職員向けの『ミュージアムの事例から知る！学ぶ！合理的配慮のハンドブック』の刊行、７件の現代美術等国際展に出展する18アーティストへの支援等様々な事業を実施した。

2

主要記事

令和5年	6月	27日	東京国立近代美術館の鏑木清方《築地明石町》、《新富町》、《浜町河岸》が重要文化財に指定された
	7月	1日	田中正之が理事に就任
	11月	26日	国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム「ナショナル・アートミュージアムのいま」開催
令和6年	1月	5日	森孝之が理事を退任
	1月	6日	石﨑宏明が理事に就任
	2月		国立新美術館「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」展の成果により蔡國強氏が令和5年度（第74回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞
			国立新美術館「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」展ほかの成果により大巻伸嗣氏が令和5年度（第74回）芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞

「東京国立近代美術館70周年記念展　重要文化財の秘密」会場風景
撮影：木奥惠三

国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム「ナショナル・アートミュージアムのいま」

国立新美術館「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」会場風景
撮影：顧劍亨　提供：蔡スタジオ

国立新美術館「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」会場風景
撮影：木奥惠三

3

特徴的な取組

東京国立近代美術館

重点的に取り組んでいる女性作家の顕彰において、桂ゆき（ユキ子）《秋》（1955年）、毛利眞美《裸婦（B）》（1957年）など女性作家の収蔵を行い、着実な成果を挙げた。また、所蔵作品展内での「女性と抽象」（令和５年９月20日～12月３日）などの展示を通して女性作家の再評価を進め、好評を得た。

子ども・子育て支援策として、「周囲の目が気になって、美術館には子どもを連れて行きにくい」というファミリー層のために、子どもと一緒に気兼ねなく美術館を楽しんでいただける「Family Day こどもまっと」を所蔵作品展にて実施。子どものお喋りや泣き声を気にしない環境づくり、作品に親しむための子ども向け鑑賞ツールの配布、子どもを対象としたイベント、子どもファスト・トラックなどを実施した。２日間の来館者数計は5,265人（うち小中学生308人、未就学児1,821人）、アンケートでの再来訪意向（「是非また来たい」「また来たい」）は85.8%と高い評価を得た。また、コロナ禍で令和２年度から休止していた夏の全館イベント「MOMATサマーフェス」を4年ぶりに開催。展覧会を中心に、金曜夜の対話鑑賞プログラム「フライデー・ナイトトーク」や夏休みにあわせた子ども向けプログラムのほか、鑑賞後の時間をガーデンカフェ気分で楽しんでいただけるよう、レストラン「ラー・エ・ミクニ」によるフード・ドリンクのテイクアウト販売や屋外テラス席の設置などを行った。

そのほか、コロナ禍ではオンラインで実施していた外国人向けの英語による鑑賞プログラム「Let's Talk Art!」を、11月から実施形態を変えて、「対面・無料・事前申し込み不要」で21回実施した。

「女性と抽象」会場風景
撮影：大谷一郎

「Family Day こどもまっと」の様子

「MOMATサマーフェス」の様子

「Let's Talk Art!」の様子
撮影：加藤健

国立工芸館

令和５年度は、４本の企画展と１本の所蔵作品展を開催した。なかでも世界的認知度を誇るコンテンツとコラボレーションした「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」では開館以来最高となる入館者数を記録し工芸鑑賞者の裾野を広げる大きな役割を果たした。また秋に開催した「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川－麗しき美の煌めき－」は隣接する石川県立美術館と初めて共同企画した展覧会であるが、皇室と石川とのつながりを紹介し、県民をはじめとする観覧者に皇室文化に親しんでもらう機会となった。夏季には金曜、土曜に夜間開館を実施し新たな顧客の開拓につなげた。移転開館記念日の10月25日は中庭を開放し金子潤作品を間近で見られるイベントを恒例としているが、夜間開館時にも行ったところライトアップされた状態を至近距離で鑑賞できると高評価であった。また令和５年度より移転後初となるボランティアを募集し研修を経てデビュー、イベント補助など精力的に活動している。令和５年度初の試みとして、外郭団体との共催でホテルを会場に「Kogei Art Fair Kanazawa2023×国立工芸館プレミアムイベント」と題した体験型のプレミアムイベントを企画開催した。インバウンドの集客を目的に、茶道・工芸・食など金沢の文化資源をかけあわせた茶会、トークイベント及び工房見学を実施。茶会では令和2年度ファンドレイジングで購入した工芸作品を実際に活用した。なお当該ベントは観光庁再始動事業の採択を受けての実施である。

「ポケモン×工芸展―美とわざの大発見―」会場風景
2024 Pokémon. ©1995-2024 Nintendo/Creatures Inc. /GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展　皇室と石川－麗しき美の煌めき－」会場風景
撮影者：池田紀幸

移転開館日記念イベント「ガラスの向こうの気になる「アレ」」

「Kogei Art Fair Kanazawa2023×国立工芸館プレミアムイベント」
トークショー

京都国立近代美術館

令和５年度は、６つの企画展と４回のコレクション展を開催した。

特に令和5年度は開館60周年となり、京都国立近代美術館の歴史をアクチュアルに知る世代が次第にいなくなる中、これまでの活動を振り返って再検証し、これからの指針を改めて考える機会とすることを意識した5つの展覧会を「開館60周年記念展」として開催した。「甲斐荘楠音の全貌―絵画、演劇、映画を越境する個性」展では異なるジャンルの芸術を等価かつ横断的に研究・紹介する京都国立近代美術館の基本姿勢を再確認し、「Re: スタートライン 1963-1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」展では初めて美術館の歴史自体を展覧会のテーマとした。また「走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代」展及び「小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」展では、京都国立近代美術館が初期から展覧会の開催や作品の収集を通じてその展開に積極的に関与してきた前衛陶芸とファイバーアートといった分野の再考を行い、将来に向けての研究・議論の基盤研究となる図録を刊行した。所蔵作品を用いて開催した「京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」展では、国画創作協会の作家たちを中心に、京都国立近代美術館日本画コレクションの特徴を明確化し、その豊かさを改めて紹介する機会となった。

新たな美術鑑賞プログラム推進事業である「感覚をひらく」では、「作家、視覚障害のある方、美術館が協働したプログラムの開発（ABCプロジェクト）」を目的に、４階コレクション・ギャラリーの一部で展示「エデュケーショナル・スタディズ04　チョウの軌跡―長谷川三郎のイリュージョン」を行い、その準備過程の記録を「ABCコレクション・データベース Vol.３：長谷川三郎《蝶の軌跡》のイリュージョン」としてホームページ上で公開した。また、鑑賞ツール「さわるコレクション」を新制作すると同時に、これまでのツールを活用したワークショップなどを盲学校との連携事業として開催した。また令和５年度文化庁委託事業「文化施設の連携による共生社会推進事業」として、京都府・京都市内の文化施設が連携し開催した「『CONNECT⇄_』～アートでうずうず つながる世界～」に参加した。

また、開館60周年記念事業としてロゴを制作し、ホームページ上に開館60周年記念のページを設け、各種イベントの広報を行い、「開館60周年記念ポートフォリオ〈MoMAK 60th Anniversary Editions〉」の販売や、１階ロビーでの「ポスターでふりかえる京近美の60年」展示、「思い出募集企画〈拝啓、きょうきんび〉」など多彩なイベントを行った。

「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」会場風景
撮影：表恒匡

「思い出募集企画〈拝啓、きょうきんび〉」会場風景
撮影：守屋友樹

「ポスターでふりかえる京近美の60年」展示風景
撮影：守屋友樹

「『CONNECT⇄_』～アートでうずうず つながる世界～」展示風景
撮影：守屋友樹

国立映画アーカイブ

上映活動として、長い歴史を誇るチネマ・リトロバート映画祭で上映された発掘・復元作の中から選りすぐりの作品を取り上げた企画「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」、展覧会との連動企画である「没後10年 映画監督 大島渚」や「月丘夢路 井上梅次 生誕100年祭」、1967-8年にかけてアメリカ議会図書館から里帰りした戦前・戦中期の日本映画を再評価した企画「返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇」など、計12企画を開催した。

展示活動として、大島監督の遺した膨大な一次資料を活用してその映画作りのメソッドを実証的に示した「没後10年 映画監督 大島渚」や、日本映画黄金期の女優と監督夫妻を取り上げた「月丘夢路 井上梅次 生誕100年祭」、国民的イラストレーター和田誠と映画との深い関わりを掘り下げた「和田誠 映画の仕事」を開催した。

教育普及事業として、歴史的に顧みられることが少ない大正時代の映画スターとその作品を再評価する試みを、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント「旧劇映画の大スター 澤村四郎五郎再考　講演×『五郎正宗孝子伝』［デジタル復元版］特別上映」にて行い、講演と上映を後日YouTube公式チャンネル等で公開した。恒例の「こども映画館」や共催企画「V4中央ヨーロッパ子ども映画祭」を開催したほか、「NFAJアーカイブセミナー」を協同組合日本映画・テレビ編集協会等との共催で開催した。

館外共催事業・アウトリーチ活動として、イタリア・ボローニャでの共催企画「第37回チネマ・リトロバート映画祭「衣笠貞之助：影から光」」やアメリカ・イェール大学での共催上映「日本映画における喜劇の遺産」、北海道から沖縄までの全国巡回上映「優秀映画鑑賞推進事業」、山形国際ドキュメンタリー映画祭との共催企画「野田真吉特集：モノと生の祝祭」等を開催した。

デジタルアーカイブ化や映画資料に関連した対応として、震災後100年に当たり『関東大震災映像デジタルアーカイブ』を完結させ、『フィルムは記録する ―国立映画アーカイブ歴史映像ポータル―』を拡充した。また、『はじまりの日本劇映画 映画meets歌舞伎』、所蔵映画関連資料を紹介する『映画遺産 ―国立映画アーカイブ映画資料ポータル―』を立ち上げた。これに加えて、重複して受領した資料を他の映画資料館等に頒布する新制度の運用を開始した。

上映会「蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭」チラシ

展覧会「没後10年 映画監督 大島渚」チラシ

WEBサイト「映画遺産 ―国立映画アーカイブ映画資料ポータル―」

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント「旧劇映画の大スター 澤村四郎五郎再考 講演×『五郎正宗孝子伝』［デジタル復元版］特別上映」チラシ

国立西洋美術館

展覧会においては、様々な取組により所蔵作品展の入館者数が大幅に増加した。企画展では新型コロナウイルス感染症や輸送等コスト高騰等の影響を受け、「憧憬の地ブルターニュ展―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」及び「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた」展は出品作品の殆どを国内作品が占めたが、入館者数は目標を上回った。また、「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」では、西洋美術史上もっとも重要な前衛芸術運動のひとつであるキュビスムの全貌を紹介した。キュビスムの本格的な展覧会は、我が国では半世紀ぶりの開催であった。

教育普及事業では、スクール・ギャラリートークを再開し、多くの学校から申込みを受けたほか、新規に「ふかぼりCollection in FOCUS」を実施し、多様な研究活動を紹介して好評を博した。また、令和６年度はボランティア・スタッフの入れ替え時期となるため、新規にボランティア候補生を募集し、約９ヶ月の養成研修を行なった。

公式SNSでは、Facebook、X（旧Twitter）、YouTube、Instagramの４媒体にて、事業・活動や収蔵品について日英バイリンガルによる積極的な情報発信に努め、フォロワー数はいずれも著しく増加した。

組織改編を行い経営企画・広報渉外室及び世界遺産担当室を新設した。経営企画・広報渉外室では、企業からの寄附・協賛獲得の取り組みを進め、多額の協賛金や寄附金を獲得した。世界遺産担当室においては、本館デジタルコンテンツ「ゆびさきでめぐる世界遺産－ぐるぐる国立西洋美術館－」を公開した。

川崎重工業株式会社とのパートナーシップ協定により所蔵作品展無料観覧日「Kawasaki Free Sunday」を開始したほか、親子連れ等を対象とした無料観覧日「にぎやかサタデー」を初めて開催。そのほか観覧券販売のオンライン化の促進や「国立西洋美術館常設展パスポートチケット」の作成・発売を実施し、来館者サービスの向上に努めた。

国立西洋美術館が所蔵するロダン彫刻の３Ｄ化プロジェクトのクラウドファンディングを開始した。

企画展「スペインのイメージ：版画を通じて写し伝わるすがた」展示風景
撮影：上野則宏

「ふかぼりCollection in FOCUS　あばく：絵画層の下に隠された下描きを視る」髙嶋美穂（特定研究員）

「おしゃべりOK！にぎやかサタデー」当日の様子

「国立西洋美術館のロダン彫刻全作品の3Dデータが閲覧できるWEBサイト『みんなの3Dロダン図鑑』をつくろう！」ポスター

国立国際美術館

令和５年度は歩行者デッキ架設工事に伴う休館により、展覧会事業を中心に縮小せざるを得なかったが、３本の企画展と３本の所蔵作品展を開催した。当館の所蔵作品展は、会期毎にテーマを設定し、その都度展示替えを行いながら作品を紹介している。1980年代から2010年代までの現代美術の流れを幅広く展覧した「コレクション1 80/90/00/10」、新収蔵作品であるルイーズ・ブルジョワの作品を起点に様々な身体表現による作品で構成した「コレクション2 身体―――身体」は、いずれも企画性と構成力に対する評価が高く、入館者数の増加が見られた。企画展「ホーム・スイート・ホーム」では、多様な意味を持つ「ホーム」を表現した現代美術作品を集め、定評のある海外作家に比較的若い国内作家を加えることで、現代美術への関心をより高める工夫を行った。

国立国際美術館の所蔵作品は現代美術を中心としているため、所蔵作品の画像使用に際して著作権許諾の問題が生じるケースが多い。令和５年度から著作権者に対して商業的使用を伴わない場合の画像使用に優先的な許諾を求める手続きをとったことにより、画像使用を伴うSNS等の効果的な広報活動を実施できたことが、少なからず入場者数の増加につながったと考える。

オンラインの取組としては、これまでの国立国際美術館におけるデータベース整備そしてアーカイブズ整備の一つの成果となる「NMAOサーチ」を公開した。これにより所蔵作品及び作家、さらには過去の展覧会や刊行物等の情報について横断検索が可能となり、特に過去の展覧会情報や資料（展示風景等含む）については他館での事例も少なく、関係者から大きな反響を得た。公開に際しては、前述の著作権許諾における取組も活かされている。

さらに、教育普及事業においては、ユニバーサルプログラムの一環として、当館の建物に関する触察ツールを検討するワークショップを実施し、視覚障害の有無に関わらず誰もが当館の建物を楽しむためのサポートとなる「たてもの鑑賞サポートツール」を開発した。

そのほか、海外の美術館との連携では、韓国国立現代美術館（MMCA）の企画協力を得て、５人の韓国系女性作家の短編作品を紹介する「第26回中之島映像劇場「空、境界のない」」を実施し、映像上映に加え、MMCAの学芸員を招いて担当者による対話を行った。

「ホーム・スイート・ホーム」会場風景　鎌田友介《Japanese Houses》2023年　作家蔵
撮影：福永一夫

「NMAOサーチ」

みる＋（プラス）「何を知りたい？ 感じたい？ 国立国際美術館の触察ツールをみんなでかんがえよう」ワークショップ活動風景

「第26回中之島映像劇場「空、境界のない」」会場風景

国立新美術館

令和５年度は、西洋のオールドマスターから現代美術まで多様なジャンルの芸術を斬新な切り口で紹介する展覧会を開催した。「ルーヴル美術館展　愛を描く」ではかつてないテーマ設定で西洋絵画を紹介し、歴史的作品の新たな見方や解釈の可能性を提示した。「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」は、仕切り壁を立てずに2000㎡の展示室をダイナミックに活用した展示で大きな反響を呼び、短い会期にも関わらず目標の４倍余りの来場者を迎えた。「テート美術館展　光　― ターナー、印象派から現代へ」は「光」をテーマとし、19世紀から現代までの作品の新たな視点や解釈を提示することができた。「大巻伸嗣　Interface of Being　真空のゆらぎ」では、音響、照明、映像、動きの効果などを駆使したこの作家ならではのスペクタクルな展示空間を入場無料で公開し、幅広い層に向けた現代美術の発信に貢献した。なお、当館での展覧会により蔡國強氏は令和５年度（第74回）芸術選奨文部科学大臣賞を、大巻伸嗣氏は同新人賞を受賞した。

美術関連資料の収集・デジタル化・特別資料閲覧も継続して行い、OPACのWeb企画では所蔵資料の紹介や、国内の展覧会への資料提供等、情報発信に努めた。

教育普及活動においては、中高生を対象とした長期ワークショップ「NACT YOUTH PROJECT 新美塾！」の第２期を実施したほか、新たな取り組みとして、国立アートリサーチセンターとの共同企画による「子どもたちの美術館デビュー応援プログラム」を実施し、子どもの学習支援や食事支援活動を行うNPOとの連携により、子どもたちが美術館という場所を知るきっかけ作りに取り組んだ。展覧会関連イベントとして、国内外からキュレーターらを招いたトークセッションや、壮大なインスタレーション空間の中でアーティスト・トークやパフォーマンスを実施し、観覧者から好評を博した。

「テート美術館展　光　― ターナー、印象派から現代へ」会場風景
撮影：上野則宏

「イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル」会場風景
撮影：神宮巨樹

「NACT View 03 渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト）私はフリーハグが嫌い」会場風景
撮影：井上桂祐

「NACT YOUTH PROJECT 2023 新美塾！」

国立アートリサーチセンター

設立記念シンポジウム「ナショナル・アートミュージアムのいま」は、イギリス、フランス、米国、シンガポール、日本から国立美術館長及び政策担当者が登壇し、多角的に「国立美術館」を再考する好機となった。後日ウェブサイトにアーカイブ映像を公開した。

国立美術館コレクションの新しい公開事業である「国立美術館 コレクション・プラス」の募集にあわせ、プレ事業として長崎県美術館で「鴨居玲のスペイン時代―スペイン・バロックの巨匠ジュゼペ・デ・リベーラの作品とともに」を実施した。長崎ゆかりの画家である鴨居玲の作品（長崎県美術館蔵）に、鴨居がスペイン留学中に影響を受けたリベーラの作品（国立西洋美術館蔵）を加えて展示したもので、陰影に富んだ鴨居の作品の画風確立について理解を深める機会となった。

保存修復においては、東京文化財研究所との共催により、専門家向けのワークショップを開催し国内の保存修復技術の向上をはかった。また、一般向けに講演会も開催し、ウェブサイト上で記録動画を公開して広く情報発信を行った。

日本のアートに関する国際的リサーチ・ポータル機能確立について検討を進め、この一環として独自のレファレンス・ツール作成に取り組み、「日本アーティスト事典」の新規公開を行った。同事典は、日英二か国語で利用できる日本のアーティストに特化したオンライン総合事典としては日本初のものである。

「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（JST COI-NEXT事業）に参画し、研究機関・企業・地方自治体等と連携して研究を推進した。東京藝術大学・ブリティッシュ・カウンシルの協力のもと国際シンポジウムを開催し、英国からの４名の実践者による先進的な事例紹介、基礎資料2冊の日本語訳を刊行した。日英同時通訳、手話、文字支援も行った。

社会的課題となっている、Diversity（多様性），Equity（公平性），Accessibility（アクセシビリティ），Inclusive（包摂性）についての研究会「DEAIリサーチラボ」を発足させ、ミュージアムの合理的配慮について調査研究を行い、『ミュージアムの事例（ケース）から知る！学ぶ！合理的配慮のハンドブック』を刊行した。

アートと社会との接点を増やすため、国立美術館各館と連携し、企業・団体との連携事業や美術館施設利用のコーディネート、アートプログラムの開発などを行った。美術館に関する意識調査を行い、令和４年度の調査結果の一部を公開した。

国立美術館 コレクション・プラス プレ事業「鴨居玲のスペイン時代―スペイン・バロックの巨匠ジュゼペ・デ・リベーラの作品とともに」（長崎県美術館）

文化財修復処置に関するワークショップ―モジュラー・クリーニング・プログラムの利用について―

共創フォーラムVol.1　Art, Health & Wellbeingミュージアムで幸せになる。英国編

ミュージアムの事例（ケース）から知る！学ぶ！合理的配慮のハンドブック

4 展覧会活動

4—1　所蔵作品展

所蔵作品展の開催は、国立美術館の基幹となる活動のひとつであり、各館とも、漫然と名作を並べて展示するのではなく、調査研究の成果に基づき、季節に合わせた作品選定、企画展と連動したテーマ展示など時宜をとらえた企画を多く実施するなど、様々な工夫を凝らして鑑賞意欲や来館動機を高めるとともに、来館者の満足度の向上に努め、満足度調査結果及び入館者数のいずれについても前年度を上回る結果となった。

館　　名	開催日数	展示替回数	入館者数	満足度※1
東京国立近代美術館	265	5	286,612	90.4%
国立工芸館	69	1	15,926	95.1%
京都国立近代美術館	297	4	82,780	82.6%
国立西洋美術館	278	3	562,918	95.0%
国立国際美術館	160	3	124,788	85.1%
合　計	1,069	16	1,073,024	89.6%

※1 「満足度」とは、満足度調査における「良い」以上の回答率を指し、合計欄に記載の値は平均値である。以下同じ。

東京国立近代美術館

19世紀末から今日に至る日本の近現代美術の流れをわかりやすく伝えるとともに、部屋ごとにテーマを設けて各時代の美術を新鮮な切り口から提示するよう心がけた。時宜に適った企画としては「女性と抽象」、「関東大震災から100年」、「生誕100年大辻清司」などが挙げられ、いずれも好評を得た。またパウル・クレー《黄色の中の思考》、池田蕉園《かえり路》、ジェルメーヌ・リシエ《蟻》など新収蔵作品をいち早くお披露目する特集を組むことで、美術館が生き生きと変化を続ける組織であることを印象づけた。一方で、東山魁夷や芹沢銈介といった重要、人気作家の作品をまとめて小個展形式で紹介する企画、鑑賞プログラムでの長年の実践を活かした企画、継続的に開催してきたアーティスト・トークの記録映像を用いた企画など、長い歴史と蓄積を活かした試みも多数行った。変化と継続性、双方を意識した企画により、当館コレクションの厚みをひろくアピールすることができた。

「新収蔵＆特別公開｜ジェルメーヌ・リシエ《蟻》」会場風景
撮影：大谷一郎

「芹沢銈介と、新しい日々」会場風景
撮影：大谷一郎

国立工芸館

令和５年度の所蔵作品展は「水」をテーマに、工芸・デザイン作品に表現された水や、水をいれる器の形に注目して国立工芸館所蔵品を中心に紹介した「水のいろ、水のかたち展」を開催した。水は不定形でありながら我々の生活に欠かすことができないものであるため、古来より芸術作品において海や川を始め様々な形や色で描かれ、多くの作家に着想を与え、多岐にわたる技で表現されてきた。とらえどころのないものだからこそ、作家の観察眼によって個性が表れる水の表現を提示した構成であった。さらに花瓶、水差しなど水をいれるために制作された器も展示することで用途とその形にも改めて注目した。また重要文化財《伊賀塁座水指 銘 破袋》の出品がかなったことは館としての経験の蓄積になった。

「水のいろ、水のかたち展」会場風景

「水のいろ、水のかたち展」会場風景

京都国立近代美術館

令和５年度は京都国立近代美術館開館60周年記念ということもあり、多岐にわたる内容で開催した。まずは、京都国立近代美術館が開館時から定期的に開催していた現代美術の動向シリーズを取り上げた企画展に合わせて、「現代美術の動向」展に関連する所蔵作家や作品を紹介した「所蔵品にみる「現代美術の動向」展」や、京都国立近代美術館開館年に開催した「北大路魯山人」展を振り返る「特集：北大路魯山人」と題した展示を行った。走泥社展の会期には走泥社と関わりの深い歴程美術協会を紹介する展示を行い、所蔵作品を中心とした日本画の企画展の会期には国立アートリサーチセンターの事業を活用して東京国立近代美術館から福田平八郎や徳岡神泉らの代表作を借用し、所蔵作品とともに企画展に合わせた内容で展示した。また、2023年は関東大震災から100年の節目に当たるため、関東大震災に関連する作品を特集展示し、2023年に亡くなった所蔵作家である野村仁の追悼展示も行った。さらに、60周年企画として、京都国立近代美術館に関する思い出を募集し、それらの投稿に関連する展示も行った。

「「京都画壇の青春展」によせて」会場風景

「関東大震災から100年 池田遙邨《大正12年9月関東大震災》の全貌」会場風景

国立西洋美術館

令和４年度に引き続き、年代順を基本としつつテーマ性も兼ね備えた所蔵作品展示を行うとともに、小展示コーナーCollection in FOCUSを複数設け、表面からは見えない絵画の下描きをあばきだした科学調査の一端を紹介するなどして、好評を博した。常設展示室内では、24～209点の作品を用いた小企画展を４回開催した。うち１回の「もうひとつの19世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち」は国内コレクターから極めて良質なブーグロー作品４点の寄託を受けたことが契機となって実現したものであり、国内に所蔵されるコレクションの有効活用という点からも、意義のある展示となった。

「Collection in FOCUS　絵具層の下に隠された下描きを視る」
撮影：上野則宏

小企画展「もうひとつの19世紀―ブーグロー、ミレイとアカデミーの画家たち」展示風景
撮影：上野則宏

国立国際美術館

国立国際美術館の所蔵作品展は、いわゆる所蔵作品が常設展示化されたものではなく、企画展の会期にほぼ応じた会期設定のもと、大部分の作品の展示替えを行いながら実施している。近年はこれまで以上にテーマ設定を強化し、新たに購入した作品のお披露目や近年の新収蔵作品の積極的な活用を心がけた展示を行なっている。令和５年度は、令和４年度から続いたコンセプチュアル・アートの旗手メル・ボックナーの所蔵作品による特集展示、村上隆の新収蔵作品《727 FATMAN LITTLE BOY》(2017年) を核にして80年代以降の現代美術動向を示す「コレクション1　80/90/00/10」、同じく新収蔵作品であるルイーズ・ブルジョワの《カップル》(1996年) を起点に身体をめぐる表現をテーマにした「コレクション２ 身体―――身体」など、その企画性と構成力により大きな評価を受けることができた。

「コレクション１　80/90/00/10」会場風景

「コレクション２　身体―――身体」会場風景
撮影：福永一夫

4―2　企画展

各館において、調査研究の成果に基づき、世界の美術の新たな動向を紹介する展覧会や我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介し、国際的な美術動向に位置付ける展覧会、メディアアート等の先端的な展覧会、作家・作品の再発見、再評価、我が国に所在するコレクションの積極的活用を目指した展覧会を開催した。国内美術館との連携により主に国内所蔵作品で構成した企画展、最新の研究成果を盛り込んだ現代作家の個展を行うなど、意欲的な取組を行った。

来館者満足度調査及び入館者数とも前年度を上回り、いずれも美術振興の拠点として国立美術館にふさわしい魅力と質の高さを備えた展覧会であった。

館　名	実施回数	開催日数	入館者数	満足度
東京国立近代美術館	4	221	522,026	85.9%
国立工芸館	4	175	136,997	96.8%
京都国立近代美術館	5	231	71,857	91.8%
国立西洋美術館	4	235	431,892	89.3%
国立国際美術館	3	160	163,188	81.4%
国立新美術館	7	367	1,195,714	92.0%
合　計	27	1,389	2,521,674	89.5%

東京国立近代美術館

「生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」は、ヴェネチア・ビエンナーレのグランプリ受賞作家として、改めて棟方の世界的受容や業績を検証するとともに、木版画の代表作、肉筆襖絵、本の装丁、映像メディア、商業デザインまでを含む広範な分野を一堂に集めた大回顧展となった。会期中、国際交流基金のキュレーター研修生や、ジャパン・ソサエティからも来訪があり、その他にも海外の著名なアーティストや美術館長が棟方展の会場写真をSNSに投稿するなど、再び棟方の国際的な評価を高める機会となった。専門家・一般鑑賞者、双方からこの展覧会が高い評価を得たことは成果である。

「中平卓馬 火―氾濫」は、日本写真史における重要性に比べ、現存作品の少なさなどにより、これまで展覧会という形式では十分に検証されてこなかった写真家中平卓馬の没後初の回顧展として、その全体像を示すとともに、今後の中平研究に資する基盤の構築を目指した。展示構成においては、特に展覧会前半部において、当時中平の主要な発表の場であった雑誌等に焦点を当て、時系列に沿って可能な限り網羅的に、実際の刊行物を展示することにより、時代背景を含めた提示を試みた。こうした構成は、展評等においても、あらためて中平の実像に迫るものとして評価を得るとともに、来館者によるSNSを通じた発信でも、多くが充実した展示として言及するなど話題を呼んだ。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
東京国立近代美術館70周年 記念展　重要文化財の秘密	(R5.3.17) R5.4.1　～　R5.5.14	40 (54)	117,057 (142,071)	毎日新聞社、 日本経済新聞社	91.8%
ガウディとサグラダ・ファミリア展	R5.6.13　～　R5.9.10	80	279,985	NHK、NHKプロモーション、 東京新聞	78.0%
生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ	R5.10.6　～　R5.12.3	52	96,565	NHK、NHKプロモーション、 東京新聞	89.0%
中平卓馬 火―氾濫	R6.2.6　～　R6.3.31 (R6.4.7)	49 (55)	28,419 (36,670)	朝日新聞社	―
合　計		221	522,026		85.9%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」会場風景
撮影者：木奥惠三

「中平卓馬 火―氾濫」会場風景
撮影者：木奥惠三

国立工芸館

「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―」は、皇室ゆかりの美術工芸品などを収蔵・展示する皇居三の丸尚蔵館の収蔵品を通じて、皇室と石川とのつながりを紹介し、皇室文化に親しんでいただくことを主眼とした展覧会で、全５章で構成した。特に国立工芸館では、皇室に伝わった石川県ゆかりの工芸品が多数展示され、なかには献上されてから初めて制作地で公開された作品もあった。いまだ研究が進んでいない分野の名品・優品が公開され、明治期工芸の研究の広がりを具体的な作品をもって示すよい機会となった。

「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」は、1957年から1979年まで、東京国立近代美術館や京都国立近代美術館などを会場に開催された「東京国際版画ビエンナーレ展」の出品作や関連資料など70点で構成した展覧会となった。出品作品はすべて国立美術館のコレクションによるもので、歴代の展覧会ポスターなど初めて展示する作品も含んでおり、所蔵館ならではの充実した内容を実現できた。これまで領域横断的に取り上げることの少なかった版画とグラフィックデザインを包括的に紹介するために、近接し重なり合いながらも決定的なズレのある「印刷」、「版画」、「グラフィックデザイン」の関係性を〈断層〉というキーワードで示した。それぞれの領域の違いを積極的にとらえ直して自在に接続しながら、その差異を強調するような実践が展開された東京国際版画ビエンナーレ展とその時代を広く紹介するとともに、自館で開催した展覧会の意義とその役割を自己検証的に見直す機会ともなった。

展覧会名	会　　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
ポケモン×工芸展 ―美とわざの大発見―	(R5.3.21) R5.4.1　～　R5.6.11	62 (72)	81,970 (95,158)	NHKエンタープライズ中部、読売新聞 北陸支社	97.7%
皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―	R5.10.14 ～ R5.11.26	43	46,234	石川県立美術館、いしかわ百万石文化祭2023実行委員会、宮内庁、文化庁、独立行政法人国立文化財機構	91.2%
印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979	R5.12.19 ～ R6.3.3 ※1/1 能登半島地震の影響により1/2-1/5の4日間臨時休館	58	6,785	京都国立近代美術館、北國新聞社	94.8%
卒寿記念 人間国宝 鈴木藏の志野展	R6.3.19　～　R6.3.31 (R6.6.2)	12 (69)	2,008 (9,881)	NHKエンタープライズ中部、北國新聞社	―
合　計		175	136,997		96.8%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

2024 Pokémon. ©1995-2024 Nintendo / Creatures Inc. / GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

「皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川 ―麗しき美の煌めき―」会場風景
撮影者：池田紀幸

「印刷／版画／グラフィックデザインの断層 1957-1979」会場風景
撮影：エス・アンド・ティ フォト

京都国立近代美術館

「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963−1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」では、かつて京都国立近代美術館において開催した「現代美術の動向」展出品作を中心に66作家で構成し、戦後美術史において重要な位置づけにある作品だけでなく、これまで紹介される機会の少なかった作家や作品を積極的に取り上げた。展覧会の図録には、当時の図録の再録と会場写真や批評記事などアーカイブ資料を多数盛り込んだ。

「開館60周年記念 京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」では、京都国立近代美術館日本画コレクションを特徴づけている明治末から大正、昭和初めにかけての京都画壇の若手の作品を中心に、中堅・ベテランの作品も交えて紹介した。2020年に若手研究者による近代京都画壇を総覧する本が出版されるなど、この時代の作家や作品の研究が活発になっている時期に、実作品を見せることにより、更に研究が進展するものと思われる。実際、若手研究者からは喜びの声が聞かれた。また、京都市京セラ美術館で近代京都画壇の第一世代を代表する竹内栖鳳の回顧展が同時期に開催されたため、双方を鑑賞することで、理解が深まったという感想も寄せられた。コレクション展も含め、近隣館と情報交換を行い連携することは、来館者にも有効だと思われる。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
開館60周年記念 甲斐荘楠音の全貌 ―絵画、演劇、映画を越境する個性	(R5.2.11) R5.4.1 ～ R5.4.9	8 (50)	5,511 (23,909)	日本経済新聞社、 京都新聞	89.0%
開館60周年記念 Re: スタートライン 1963−1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる 美術館とアーティストの共感関係	R5.4.28 ～ R5.7.2	57	12,781	京都新聞	85.8%
開館60周年記念　走泥社再考 前衛陶芸が生まれた時代	R5.7.19 ～ R5.9.24	59	16,314	京都新聞、 関西テレビ放送	90.0%
開館60周年記念 京都画壇の青春 ―栖鳳、松園につづく新世代たち	R5.10.13 ～ R5.12.10	51	23,537	NHK京都放送局、 NHKエンタープライズ 近畿、 読売新聞社	93.5%
開館60周年記念 小林正和とその時代 ―ファイバーアート、その向こうへ	R6.1.6 ～ R6.3.10	56	13,714	―	94.1%
合　計		231	71,857		91.8%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「開館60周年記念 Re: スタートライン 1963−1970/2023 現代美術の動向展シリーズにみる美術館とアーティストの共感関係」会場風景
撮影：守屋友樹

「開館60周年記念 京都画壇の青春―栖鳳、松園につづく新世代たち」会場風景
撮影：河田憲政

国立西洋美術館

「憧憬の地 ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」は、19世紀後半から20世紀初めに日欧の画家が描いた仏ブルターニュ地方を主題とする作品約160点を一堂に集め、近代美術と同地の関係を多角的に検証した。これまで看過されてきた日本出身美術家の同地での滞在・制作を、16作家の作品や旧蔵資料によってまとまった形で紹介したのは国内外でも初めての試みであり、ブルターニュ研究及び日本近代美術研究の進展に貢献するものだった。他の国立機関より受託中の資料も出品し、それらの活用・情報公開にも寄与した。図録は外部の専門家も含め７名の著者による論考・コラムを日英バイリンガルで所収、出品作家のブルターニュ滞在歴を集約した地図も編纂するなど、内容の充実と学術性が確保された。

「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」は、パリのポンピドゥーセンター／国立近代美術館の改修を目前に控えて実現した。同館の比類のないコレクションから、キュビスムの歴史を語る上で欠くことのできない重要な作品が多数来日し、そのうち50点以上が日本初出品となる貴重な機会となった。日本でキュビスムを正面から取り上げる本格的な展覧会はおよそ50年ぶりとなり、その間に蓄積された最新の研究成果を最大限に盛り込みつつ、20世紀美術の真の出発点とも言える同運動の豊かな展開とダイナミズムを最大限示すことができた。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
憧憬の地 ブルターニュ ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷	(R5.3.18) R5.4.1 ～ R5.6.11	63 (76)	137,096 (163,253)	TBS、 読売新聞社	88.0%
スペインのイメージ： 版画を通じて写し伝わるすがた	R5.7.4 ～ R5.9.3	55	55,207	朝日新聞社	89.0%
パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展 ―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ	R5.10.3 ～ R6.1.28	98	222,599	ポンピドゥーセンター、 日本経済新聞社、 テレビ東京、 BSテレビ東京、TBS、 BS-TBS、 TBSグロウディア	91.0%
ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？ ―国立西洋美術館65年目の自問 ｜現代美術家たちへの問いかけ	R6.3.12 ～ R6.3.31 (R6.5.12)	19 (56)	16,990 (54,663)	–	–
合　計		235	431,892		89.3%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

企画展「憧憬の地 ブルターニュ―モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷」展示風景
撮影：上野則宏

企画展「パリ ポンピドゥーセンター キュビスム展―美の革命 ピカソ、ブラックからドローネー、シャガールへ」展示風景
撮影：上野則宏

国立国際美術館

「ホーム・スイート・ホーム」は、国内、及び世界各国で活躍する作家を「ホーム」の表象というテーマに基づいて選定、構成したものである。コロナ禍を経て「ステイホーム」等、日常でも多数見聞したホームという言葉がどのような意を含むのか。歴史、記憶、アイデンティティ、私たちの居場所、役割等をキーワードに表現された作品群から、私たちにとっての「ホーム」― 家そして家族とは何か、私たちが所属する地域、社会の変容、普遍性を浮かび上がらせることを試みた。特に作家選定に際しては、すでに評価を獲得して活躍している海外の作家たちに、比較的若手の国内作家も加えることにより、国内の現代美術作家たちの振興も図ることができるように心掛けた。

「古代メキシコ ―マヤ、アステカ、テオティワカン」は、古代メキシコ文明の中でも、とりわけ高度に発達したマヤ、アステカ、テオティワカンの３つの文明に焦点を当て、それぞれの文明の特異で独創的な展開を141点もの豊富な資料によって紹介した。あわせて、遺跡の発掘現場や特徴的な文化を紹介する資料映像、地図や年表等の解説パネル、音声ガイド等による補足説明によって、地理的な背景や歴史の流れを分かりやすく説明した。また、会期中には本展監修者のアリゾナ州立大学研究教授杉山三郎氏による講演会やメキシコ民族音楽の演奏会、子ども向けのワークショップなど、幅広い来館者層に対応したイベントを開催し、メキシコ文化への理解の促進に努めた。多くの来館者に対して、美術館を舞台とした異文化交流の一場面を体験してもらえたのではないかと考える。

展覧会名	会　　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリューン美術館展	(R5.2.4) R5.4.1 ～ R5.5.21	45 (93)	72,831 (139,461)	ベルリン国立ベルクグリューン美術館、 産経新聞社、MBSテレビ、共同通信社	81.4%
ホーム・スイート・ホーム	R5.6.24 ～ R5.9.10	67	22,101	―	79.6%
古代メキシコ ―マヤ、アステカ、テオティワカン	R6.2.6 ～ R6.3.31 (R6.5.6)	48 (80)	68,256 (137,585)	NHK大阪放送局、 NHKエンタープライズ 近畿、 朝日新聞社	―
合　計		160	163,188		81.4%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「ホーム・スイート・ホーム」会場風景
撮影：福永一夫

「古代メキシコ ―マヤ、アステカ、テオティワカン」会場風景
撮影：加藤成文

国立新美術館

「ルーヴル美術館展 愛を描く」について、「愛」は古代以来、西洋美術において普遍的な題材の一つであったといえるが、これをテーマにした展覧会の前例は国内だけでなく海外でも非常に少ない。本展では、ルーヴル美術館の絵画部門の所蔵品から「愛」と関連づけて解釈できる絵画73点を選出し、テーマ・時代によって５つのセクション（プロローグと４章）に分類し紹介した。「愛」という普遍的かつ馴染みやすいテーマは、これまで美術館に来たことがない若い世代にもアピールすることができた。いくつかのサブセクションのテーマ設定と作品選定及びカタログの論文には、2000年代以降のジェンダー史学の成果を踏まえた美術史研究の最新動向を反映し、男性優位の社会のなかで評価が定められてきた芸術作品に対する新しい視点や知見を伝えることに寄与した。

「大巻伸嗣 Interface of Being 真空のゆらぎ」について、大巻伸嗣は日本を代表するインスタレーション作家として、日本はもとより、近年ではアジア地域でも活発に個展を開催している。そのなかでも最大の規模で実現した本展は、SNSでも話題を呼び、48日という短い開催日数のあいだに13万人を超える来場者を迎えた。展示には、コラボレーションした関口涼子の詩のほか、映像や音響も取り入れ、また会期中には、会場で数多くのダンスパフォーマンスも行うことで、現代の総合芸術として大巻の作品世界を提示した意義は大きい。日本博の助成を得て、入場無料とすることで現代美術の裾野を広げた。また、海外メディアの招へいや外国人向けアンケート、日英バイリンガル図録の刊行など、海外発信やインバウンド対策にも力を入れた。

展覧会名	会　期	開催日数	入館者数	共 催 者	満足度
ルーヴル美術館展 愛を描く	(R5.3.1) R5.4.1 ～ R5.6.12	64 (91)	322,310 (450,531)	ルーヴル美術館、 日本テレビ放送網、 読売新聞社、 BS日テレ、ニッポン放送	90.0%
蔡國強　宇宙遊 —〈原初火球〉から始まる	R5.6.29 ～ R5.8.21	47	80,789	サンローラン	97.5%
テート美術館展 光 — ターナー、印象派から 現代へ	R5.7.12 ～ R5.10.2	72	292,525	テート美術館、 日本経済新聞社、 テレビ東京、BSテレビ東京、 TBS、BS-TBS	85.4%
イヴ・サンローラン展 時を超えるスタイル	R5.9.20 ～ R5.12.11	72	251,140	産経新聞社、TBS、 ソニー・ミュージックエンタテインメント	89.8%
大巻伸嗣 Interface of Being 真空のゆらぎ	R5.11.1 ～ R5.12.25	48	136,126	独立行政法人 日本芸術文化振興会、文化庁	97.8%
マティス 自由なフォルム	R6.2.14 ～ R6.3.31 (R6.5.27)	41 (91)	104,803 (262,734)	ニース市マティス美術館、 読売新聞社、 日本テレビ放送網	—
遠距離現在 Universal / Remote	R6.3.6 ～ R6.3.31 (R6.6.3)	23 (79)	8,021 (34,979)	—	—
合　計		367	1,195,714		92.0%

注　(　)内は会期全体の数値を参考として示しており、それぞれの合計には含めない。

「ルーヴル美術館展 愛を描く」会場風景
撮影：上野則宏

「大巻伸嗣 Interface of Being 真空のゆらぎ」会場風景
撮影：木奥惠三

4―3　映画上映等

国立映画アーカイブ

上映会は長瀬記念ホールOZUで８つ、小ホールで４つの計12企画を実施した。映画フィルムの収集保存事業と両輪をなす上映会の中でも、とりわけ「アニメーション作家 山村浩二」では、世界初の一般公開となる最初期の短篇から最新作『幾多の北』(2021年) まで、40年をこえるキャリアを年代ごとに区分けした６プログラム、47作品を上映することで、山村監督のフィルモグラフィー全体を多面的に振り返ることができた。また、第36回東京国際映画祭 (TIFF) との共催企画「TIFF/NFAJ クラシックス 小津安二郎監督週間」では、近年新たに発掘された『突貫小僧』[マーヴェルグラフ版] (1929年) の世界初上映をはじめ、多彩なゲストによるトーク付きの上映を行うことで、小津監督作品を新たな視点で捉えなおす機会とした。

展示企画としては、３つの企画展を開催した。とりわけ「没後10年 映画監督 大島渚」は、巨匠大島渚の没後10年の機会を捉えて開催した、同監督作品の上映会との連動企画である。監督が自ら体系的に遺した膨大な作品資料や個人資料をベースに、その挑戦的な知性と行動の多面体に迫るものである。この他に日本映画黄金期の女優と監督夫妻を取り上げた「月丘夢路 井上梅次 生誕100年祭」、国民的イラストレーター和田誠と映画との関わりを掘り下げた「和田誠 映画の仕事」を開催した。常設展「NFAJコレクションでみる 日本映画の歴史」も、日本映画の豊かな歴史をたどることのできる国内でも稀有な展示として引き続き多くの来館者を集めている。

上映会

タイトル	会　　期	上映日数	上映回数	入館者数	共 催 者	満足度
長瀬記念ホール OZU						
逝ける映画人を偲んで 2021-2022	(1)R5.7.4 ～ R5.9.3 (2)R5.10.10～ R5.10.22	64	145	15,214	―	93.0%
第45回ぴあフィルムフェスティバル2023	R5.9.9 ～ R5.9.23	13	48	4,494	一般社団法人 PFF、公益財団法人川喜多記念映画文化財団、公益財団法人ユニジャパン	94.3%
サイレントシネマ・デイズ 2023	R5.10.3 ～ R5.10.8	6	12	1,112	―	85.7%
TIFF/NFAJ クラシックス 小津安二郎監督週間	R5.10.24～ R5.10.29	6	14	1,818	東京国際映画祭	100.0%
月丘夢路 井上梅次 100年祭	R5.10.31～ R5.11.26	24	57	5,072	―	94.9%
返還映画コレクション(1)――第一次・劇映画篇	R5.11.28～ R5.12.24	24	55	6,471	―	81.8%
蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭	R6.1.5 ～ R6.2.4	27	53	6,362	チネテカ・ディ・ボローニャ財団、イタリア文化会館	91.9%
日本の女性映画人(2)――1970-1980年代 ※1	R6.2.6 ～ R6.3.24	42	110	9,656	―	98.0%
小ホール						
没後10年 映画監督 大島渚	R5.4.11 ～ R5.5.28	42	90	11,428	―	78.6%
EUフィルムデーズ2023	R5.6.2 ～ R5.6.30	25	58	6,847	駐日欧州連合代表部、在日EU大使館・文化機関	97.3%
アニメーション作家 山村浩二	R5.8.11 ～ R5.8.27 ※2	9	18	1,425	―	100.0%
NFAJコレクション 2024 冬	R6.1.19 ～ R6.2.4 ※3	9	18	1,367	―	100.0%
合　計		291	678	71,266		92.9%

※1　小ホールにて上映した2日2回240人を含む。
※2 ※3　会期中の金・土・日曜日のみ上映。

展覧会

展覧会名	会　期	日　数	入館者数	共 催 者	満足度
没後10年 映画監督 大島渚	R5.4.11 ～ R5.8.6 ※R5.5.30 ～ R5.6.1休室	99	7,386	―	95.6%
月丘夢路 井上梅次 100年祭	R5.8.22 ～ R5.11.26 ※R5.9.5 ～ R5.9.8、 R5.9.26 ～ R5.10.1休室	74	3,417	―	100.0%
和田誠 映画の仕事	R5.12.12 ～ R6.3.24 ※R5.12.26 ～ R6.1.4休室	81	11,469	―	96.0%
合　計		254	22,272		96.6%

上映会

〈長瀬記念ホール OZU〉

『残菊物語』（1939年、溝口健二監督）（「返還映画コレクション（1）――第一次・劇映画篇」より）

〈小ホール〉

『頭山』（2002年、山村浩二監督）（「アニメーション作家 山村浩二」より）

展覧会

展覧会「没後10年 映画監督 大島渚」会場風景

常設展「NFAJコレクションでみる 日本映画の歴史」会場風景

4―4　巡回展

国立美術館の所蔵作品を効果的に活用し、地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るとともに全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資するため、全国の公私立美術館等と連携して、国立美術館巡回展を実施した。

また、国立映画アーカイブにおいて、「優秀映画鑑賞推進事業」を全国各地で実施した。

さらに、国立アートリサーチセンターにおいては、全国の公私立美術館等の活動の充実と作品活用の促進に資する取組として、各地の美術館のコレクションの活性化も視野に入れた新しい事業として、(1) 国立美術館１館と、地方の美術館１館とが協働し、両者のコレクションを特定のテーマのもとに企画構成した展覧会「国立美術館 コレクション・ダイアローグ」、(2) 地方の美術館のコレクション展示に、関連する国立美術館コレクションを１点ないし数点加えることで、地方美術館のコレクションの魅力を引き出す特集展示「国立美術館 コレクション・プラス」の２つの事業に関し、(1) については令和７年度事業、(2) については令和６年度事業の募集を行ってそれぞれ開催館を決定した。また、募集にあわせて (2) のプレ事業を長崎県美術館で実施し、同館の所蔵する鴨居玲の作品に、国立西洋美術館の所蔵するジュゼペ・デ・リベーラの作品を加えて展示した。

国立美術館巡回展

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数	満足度
東京国立近代美術館	令和５年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち ―名作でたどる日本と西洋のアート	熊本県立美術館	51	7,656	90.7%
	高松市美術館開館35周年記念 令和５年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち ―名作でたどる日本と西洋のアート	高松市美術館	44	6,662	89.1%
	合　計		95	14,318	89.9%

「令和５年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち ―名作でたどる日本と西洋のアート」会場風景（熊本県立美術館）

「高松市美術館開館35周年記念 令和５年度国立美術館巡回展 20世紀美術の冒険者たち ―名作でたどる日本と西洋のアート」会場風景（高松市美術館）

優秀映画鑑賞推進事業（国立映画アーカイブ）

国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性について理解を促進することを目的に、文化庁、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を行った。

展覧会名	会場数	開催日数	入館者数	満足度
令和５年度優秀映画鑑賞推進事業	101会場	187（延べ日数）	26,652	91.3%

永山公民館（東京都多摩市）実施会場風景

令和5年度優秀映画鑑賞推進事業
鑑賞の手引

国立映画アーカイブの巡回上映・展示

タイトル	会場数	開催日数	入館者数	満足度
こども映画館　スクリーンで見る日本アニメーション！	6	14	700	―
MoMAK Films 2023	1	8	292	93.3%
山形国際ドキュメンタリー映画祭 2023 特集プログラム「野田真吉特集：モノと生の祝祭」	1	5	2,251	―
第37回チネマ・リトロバート映画祭「Teinosuke Kinugasa: From Shadow to Light（衣笠貞之助：影から光）」	2	8	2,421	―
「Comic Legacies on the Japanese Silver Screen（日本映画における喜劇の遺産）」	1	3	108	―
蘇ったフィルムたち チネマ・リトロバート映画祭	2	31	2,425	―
合　計	13	69	8,197	93.3%

山形国際ドキュメンタリー映画祭2023「野田真吉特集：モノと生の祝祭」

第37回チネマ・リトロバート映画祭「衣笠貞之助：影から光」会場風景

4―5　美術創造活動の活性化の推進

国立新美術館においては、我が国の芸術創造活動の活性化を推進するため、全国的な活動を行う美術団体等に公募展示室を提供するとともに、美術団体等から寄せられた要望等を参考に広報支援も実施している。新型コロナウイルスの感染拡大が徐々に収束に向かい、公募展示室の予約率は100%となり、目標を達成した。また、公募展と国立新美術館が開催する企画展の観覧料との相互割引を実施するなど連携協力した取組を行った。

館　　名	団体数	入館者数
国立新美術館	82団体	1,082,300人

【注１】　団体数は令和５年４月１日時点のもの。
【注２】　会期が年度を跨ぐ場合、当該年度（令和５年４月１日～令和６年３月31日）の入館者数を記載。

また、大巻伸嗣や和田礼治郎等国が顕彰・育成してきた芸術家のための発表機会の提供を行うとともに、新しい美術の動向や現代作家を積極的に紹介し、美術に関する新たな創造活動の展開や芸術家の育成等を支援した。

現代作家を採り上げた展覧会名	会　　期
蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる	R5.6.29　～　R5.8.21
テート美術館展　光　ーターナー、印象派から現代へ	R5.7.12　～　R5.10.2
イヴ・サンローラン展　時を超えるスタイル	R5.9.20　～　R5.12.11
大巻伸嗣　Interface of Being 真空のゆらぎ	R5.11.1　～　R5.12.25
遠距離現在　Universal / Remote	R6.3.6　～　R6.6.3
NACT View 02　築地のはら　ねずみっけ※	R5.1.12　～　R5.5.29
NACT View 03　渡辺 篤（アイムヒア プロジェクト） 私はフリーハグが嫌い※	R5.9.13　～　R5.12.25
NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT※	R6.1.24　～　R6.6.10

※パブリックスペースで展示

第97回　国展

第57回　貞香書会

「遠距離現在　Universal / Remote」会場風景
撮影：木奥惠三

「NACT View 04　和田礼治郎：FORBIDDEN FRUIT 」会場風景
撮影：宮島径

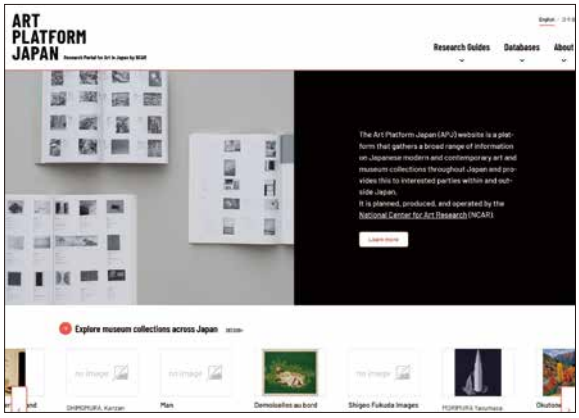
5 美術情報の収集・発信活動

5—1　情報資源発信に向けた取組

国立アートリサーチセンターにおいて「全国美術館収蔵品サーチ」や「メディア芸術データベース」を運営し、国内美術館や関係機関と連携し、国内美術館所蔵作品等情報の集約・発信に努めた。

国立美術館の情報発信については、ホームページにおいて、引き続き展覧会情報や調査研究成果などの公表を積極的に実施するとともに、所蔵作品等のデジタル化・データベース化を進め、国立アートリサーチセンターを中心に「所蔵作品総合検索システム」に収録する収蔵作品の著作権調査等を行い、同システムの収録画像の充実を図り、国立美術館コレクションの周知に努めた。

また、現代美術やメディア芸術の国際展等へ出展・参加する作家等に対する支援等を通じて、日本の現代アートの海外における存在を強化し、国際的な評価の向上に向けた取組を実施した。



「アートプラットフォームジャパン」トップ画面

「全国美術館収蔵品サーチ」

全国美術館収蔵品サーチ登録件数

新規登録館数	本年度登録館累計(館)
35	198

新規登録件数	本年度登録累計(件)
126,286	287,307

メディア芸術データベース登録件数

新規登録件数	本年度登録累計
40,890	1,069,786

ホームページアクセス件数

館　　名	アクセス件数(ページビュー)
本部	1,723,457
国立アートリサーチセンター	145,870
東京国立近代美術館(本館・国立工芸館)	9,449,624
京都国立近代美術館	2,013,411
国立映画アーカイブ	1,919,436
国立西洋美術館	5,452,378
国立国際美術館	2,659,863
国立新美術館	16,507,881
合　計	39,871,920

所蔵作品データ等のデジタル化

館　　名	画像データ				テキストデータ			
	デジタル化件数		累計公開件数	公開率	デジタル化件数		累計公開件数	公開率
	新規	累計			新規	累計		
東京国立近代美術館	34	11,912	8,296	60.3%	66	12,876	12,426	90.3%
国立工芸館	217	5,434	4,140	99.5%	51	5,773	4,988	119.9%※1
京都国立近代美術館	150	10,240	9,496	70.2%	244	16,561	15,817	116.9%※1
国立映画アーカイブ	—	—	—	—	6,216	306,290	—	—
国立西洋美術館	40	4,692	4,692	72.7%	40	5,129	5,129	79.4%
国立国際美術館	31	8,884	5,098	62.1%	45	9,667	8,762	106.8%※1
合　計	472	41,162	31,722	68.8%	6,662	356,296	47,122	102.2%

【注1】「デジタル化件数」は、各館のローカルシステムにおける画像及びテキストデータの登録件数である（国立映画アーカイブについては、ローカルシステムであるNFADへの映画フィルム及び映画関連資料のテキストデータ登録件数を掲載している）。

【注2】「累計公開件数」は、「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム」（https://search.artmuseums.go.jp/）における画像及びテキストデータの公開件数である。

【注3】上表のほか、東京国立近代美術館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/collection）において作品のテキストデータ12,219件及び画像データ11,270件、国立工芸館ではホームページ内「作品検索」（https://www.momat.go.jp/craft-museum/collection）において作品のテキストデータ2,516件及び画像データ1,212件、京都国立近代美術館では「京都国立近代美術館収蔵品データベース」（https://jmapps.ne.jp/momak/）において作品のテキストデータ15,817件及び画像データ14,065件、国立映画アーカイブでは「国立映画アーカイブ所蔵映画フィルム検索システム」（http://nfad.nfaj.go.jp/）において日本劇映画のテキストデータ8,045件、国立西洋美術館では「国立西洋美術館所蔵作品データベース」（https://collection.nmwa.go.jp/artizeweb/）において作品のテキストデータ6,362件及び画像データ6,624件、国立新美術館では「ANZAÏ フォトアーカイブ」（http://db.nact.jp/anzai/）においてアーカイブズ資料のテキストデータ3,217件を公開している。

※1　国立工芸館、京都国立近代美術館、国立国際美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載している場合等があるため、テキストデータの公開率が高くなっている。

5―2　美術情報・資料の収集及び情報サービスの提供

館　　名	収集件数	累計件数	利用者数	図書室等のオンライン利用数（件）
東京国立近代美術館	3,130	161,354	4,698	2,694,136
国立工芸館	2,169	35,131	2,118	693,621
京都国立近代美術館	911	37,347	1	100,387
国立映画アーカイブ	1,072	54,903	1,979	2,153,160
国立西洋美術館	821	55,867	155	285,032
国立国際美術館	2,120	59,100	5	108,059
国立新美術館	2,509	168,020	30,329	2,540,468
合　計	12,732	571,722	39,285	8,574,863

【注1】上記の図書室等のほか、東京国立近代美術館は本館４階（令和２年度より新型コロナウイルス感染防止のため停止していたが、令和４年10月にリニューアルし再開した）、京都国立近代美術館は４階、国立西洋美術館は１階、国立国際美術館は地下１階に図録等を閲覧できる情報コーナーを設けている。

【注2】平成30年11月３日より京都国立近代美術館及び国立国際美術館では事前予約制による資料閲覧を開始したため、予約閲覧利用者数を「図書室等利用者数」の欄に記載している。

【注3】「図書室のオンライン利用者数」は蔵書検索（OPAC）のアクセス数又は検索数、リポジトリ閲覧件数、パスファインダー閲覧数のうち該当するものの合計値である。

東京国立近代美術館　アートライブラリ
撮影：上野則宏

国立工芸館　アートライブラリ

国立映画アーカイブ　図書室

国立西洋美術館　研究資料センター

国立国際美術館　情報コーナー

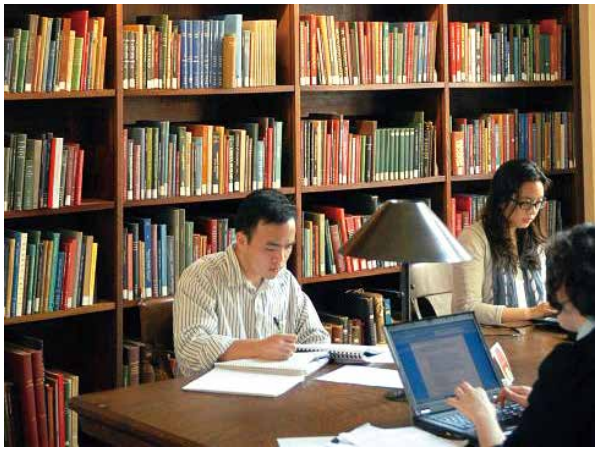
国立新美術館　アートライブラリー

JACプロジェクト

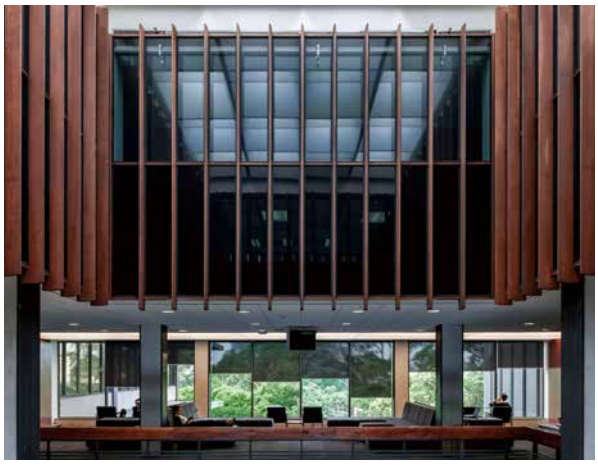
国立新美術館では、海外では入手が困難な日本の展覧会カタログを海外の日本美術研究の拠点に寄贈するJAC（Japan Art Catalog）プロジェクトを実施し、日本の美術館による研究成果を発信した。また、JACプロジェクトに加えて、ハイデルベルク大学CATS図書館に40冊の資料を寄贈した。

寄贈（JACプロジェクト）	
寄贈先	寄贈資料（冊）
フリーア美術館　アーサー・M・サックラー美術館図書館（スミソニアン研究所）（米国）	217
コロンビア大学　エイヴリー建築・美術図書館（米国）	37
ライデン大学　アジア図書館（オランダ）	284
シドニー大学　フィッシャー図書館（オーストラリア）	138
合　計	676

フリーア美術館　アーサー・M・サックラー美術館図書館


コロンビア大学　エイヴリー建築・美術図書館

ライデン大学　アジア図書館


シドニー大学　フィッシャー図書館

5―3　我が国現代美術やメディア芸術の国際発信の推進、現代作家の国際発信支援等

日本現代美術のアーティストが海外で開催される国際展等に出品するに際して、ビエンナーレ、トリエンナーレなど主要な国際展に対する支援を行う。日本のアーティストの国際発信を支援することにより、日本の現代アートの海外における存在を強化し、価値向上を目的とする。国立アートリサーチセンターでは令和５年度に７件の国際展に出品したアーティストを18名支援した。

また、日本の現代アートの理解を促進し海外における研究を促進するため、日本の現代アートに関する主要文献を英訳しホームページにて発表した。国立アートリサーチセンターにおいて、令和５年度は各文献の翻訳に必要な著作権等権利処理等を行い、令和６年６月末までに６件の翻訳に着手している。

タイランド・ビエンナーレ・チェンライ 2023
木戸龍介《Inner Light》2023、制作風景

第14回上海ビエンナーレ、2023、展示風景（上海当代芸術博物館）

第24回シドニー・ビエンナーレ
Maru Yacco《Sydney parade》2024、展示風景（ニューサウスウェールズ州立美術館）

第13回台北ビエンナーレ
dj sniff (Takuro Mizuta)《Transformer》2023、台北市立美術館

6 教育普及活動

6—1　幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）及びラーニングコンテンツ等の開発

各館においてコロナ禍で定着していたオンラインによるプログラムに加え、令和５年度は対面によるプログラムも多数実施した。事業内容や社会状況に合わせて開催形式を選択し、より多くの人が参加・視聴しやすい環境を心掛けたことにより、満足度も高い水準を維持することができており、参加者数も大幅に増加した。

東京国立近代美術館では、特別支援学校の生徒の受入れを試行的に行ったほか、国立新美術館ではこれまで年間１回開催していた学校招待デー「かようびじゅつかん」の実施回数を増やし、学校に通う子どもたちの鑑賞機会をさらに拡充させるなど、幅広い層への鑑賞機会の創出につながる取組を実施した。

また、国立アートリサーチセンターと各館の連携により、主に発達障害のある方とその家族に向けて、やさしい文章と写真で構成した来館案内冊子「ソーシャルストーリー」全７館分を作成するなど、幅広い人々を対象とするラーニングコンテンツの開発を進めた。

館　　名	実施回数	参加者数	満足度
東京国立近代美術館	375	7,689	94%
国立工芸館	112	3,261	97%
京都国立近代美術館	70	3,482	89%
国立映画アーカイブ	188	12,996	93%
国立西洋美術館	315	9,134	96%
国立国際美術館	159	4,685	98%
国立新美術館	107	11,046	97%
合　計	1,326	52,293	95%

注　満足度調査実績は、「良い」「普通」「悪い」のうち「良い」と回答した者の割合である。

6—2　ボランティアや支援団体との相互協力等による教育普及事業及び企業や地域等との連携による事業の開発・実施等

ボランティアスタッフがかかわる事業は、各館の事業のためだけでなく、各地の美術館やアートを通じた市民活動を担う人々の育成にもつながるような広がりをもつものである。教育普及の一環としてボランティアスタッフの育成を行う館では、養成研修を通して、ボランティアスタッフ自身が美術館や作品、ボランティア活動への理解を深め、よりよい活動を来館者に提供できるよう、配慮している。

令和５年度は、コロナ禍を経て通常活動に戻った年であり、ようやく以前のような対面でのプログラムが実施されるようになった。また、企業や地域との連携については、国立アートリサーチセンターにおいて、東京藝術大学ほか企業・地方自治体・NPOと連携して超高齢社会における孤独・孤立や認知症といった社会的課題に対応する研究プロジェクトが進められている。

館　　名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数（延べ人数）	事業参加者数
東京国立近代美術館	49	494	3,808
国立工芸館	35	87	264
京都国立近代美術館	16	—	—
国立西洋美術館	56	911	5,271
国立国際美術館	15	—	—
国立新美術館	62	18	642
合　計	233	1,510	9,985

注　京都国立近代美術館と国立国際美術館ではボランティアによる事業を実施していないためボランティア登録者数のみを記載している。

京都国立近代美術館 エデュケーショナルスタディズ04「チョウの軌跡ー長谷川三郎のイリュージョン」会場風景
撮影：表恒匡

国立映画アーカイブ「こども映画館　2023年の夏休み★」会場風景

国立西洋美術館 スペインのイメージ展「スペイン舞踊＆トーク」濱田吾愛（カンテ）、中川浩之（ギター）、深沢美生（バイレ）

国立国際美術館「特別対談　村上隆×篠原資明」会場風景
撮影：福永一夫

国立新美術館「かようびじゅつかん」

東京国立近代美術館「所蔵品ガイド」の様子
撮影：加藤健

国立工芸館 ガイドスタッフ養成研修

国立新美術館 サポート・スタッフの活動

7 調査研究活動

7—1　調査研究一覧

館　　名	調査研究件数
国立アートリサーチセンター	23
東京国立近代美術館	24
国立工芸館	27
京都国立近代美術館	21
国立映画アーカイブ	22
国立西洋美術館	26
国立国際美術館	24
国立新美術館	17
合　計	184

科学研究費補助金を受けた調査研究

館　　名	タイトル	氏名（職名）
東京国立近代美術館 （国立アートリサーチセンター）	「写真・映像の「影響」から見た日本の前衛芸術——昭和戦前期を中心に」	谷口英理 （主任研究員）
東京国立近代美術館	「1990年代から2000年代のロンドンにおける具象絵画に関する研究」	桝田倫広 （主任研究員）
東京国立近代美術館 （国立工芸館）	1920-50年代のデザイン／工芸の実践に関する基礎的研究	中尾優衣 （主任研究員）
東京国立近代美術館 （国立工芸館）	近代日本における中国陶磁研究への新たな視座—小森忍の活動を通して	宮川典子 （特定研究員）
東京国立近代美術館 （国立映画アーカイブ）	ナショナル・フィルモグラフィ構築に向けた調査研究： 塚田嘉信コレクションを活用して	入江良郎 （主任研究員）
東京国立近代美術館 （国立映画アーカイブ）	日本における70ミリ劇映画文化の受容とそのイメージの復元	冨田美香 （主任研究員）
東京国立近代美術館 （国立映画アーカイブ）	カラー映画フィルムのスペクトル分析に基づく忠実な色再現と 褪色補正に関する基盤研究	大傍正規 （主任研究員）
京都国立近代美術館	20世紀後半の現代陶芸の動向についての基礎的研究	宮川智美 （任期付研究員）
京都国立近代美術館	中近世ドイツ語圏の金工の社会史的研究—W.ヤムニッツァーを中心に	村松綾 （任期付研究員）
国立西洋美術館	「装飾的」なる概念を介した19世紀末美術と演劇の連動 —ナビ派と芸術座を中心に	袴田紘代 （主任研究員）
国立西洋美術館	美術作品や歴史資料中の膠着材の同定法の構築 —方法の改善・発展と実践	髙嶋美穂 （特定研究員）
国立西洋美術館	松方コレクション来歴研究とデジタル・カタログ・レゾネ試作	川口雅子 （主任研究員）
国立国際美術館	現代美術に関する収集アーカイブズ構築と公開の為の方法論策定： 画廊旧蔵資料調査から	児玉茜 （特定研究員）

注　法人所属研究員が研究代表者として行った研究のみ掲載。

7―2　調査研究成果の発信

展覧会図録等における発表等

館　　名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	パンフレット・ガイド等
国立アートリサーチセンター	0	0	0	5
東京国立近代美術館	4	1	1	3
国立工芸館	2			6
京都国立近代美術館	3	1	5	3
国立映画アーカイブ	1	0	4	32
国立西洋美術館	3	1	3	4
国立国際美術館	1	0	4	3
国立新美術館	6	1	0	5
合　計	20	4	17	61

注　「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子供向けの鑑賞ガイド等が含まれる。

学会における発表等

館　　名	学会発表等	論文発表件数等			
		学術書籍、研究報告書等の発行	論文掲載（査読あり）	論文掲載（査読無し）	その他
国立アートリサーチセンター	15	2	0	5	18
東京国立近代美術館	35	7	0	23	45
国立工芸館	8	0	0	9	30
京都国立近代美術館	14	0	0	17	24
国立映画アーカイブ	48	4	5	2	12
国立西洋美術館	19	5	2	6	16
国立国際美術館	12	3	0	4	21
国立新美術館	1	7	0	3	7
合　計	152	28	7	69	173

注　当法人以外が発行・主催する学術雑誌、学会等に限る。

館ニュース・パンフレット・ガイド等

東京国立近代美術館「生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ」セルフガイド

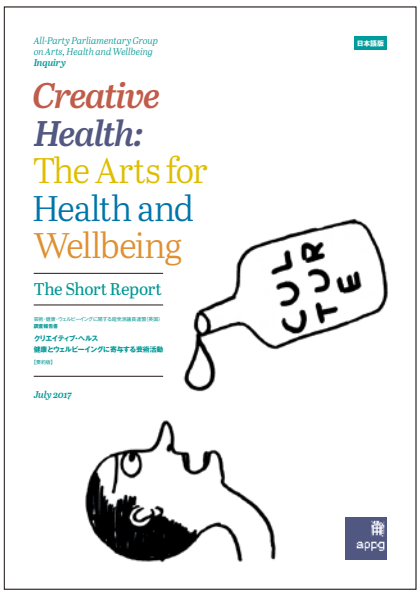
京都国立近代美術館「開館60周年記念 小林正和とその時代―ファイバーアート、その向こうへ」図録（テキスト編・ヴィジュアル編の2冊組）

国立映画アーカイブ「NFAJニューズレター」
第21号

国立西洋美術館ニュース
「ゼフュロス」第89号

国立国際美術館『「コレクション１　80/90/00/10」小冊子』

国立新美術館『蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる　ジュニアワークシート』



国立アートリサーチセンター『クリエイティブ・ヘルス：健康とウェルビーイングに寄与する芸術活動（要約版）』〈日本語版〉

8 コレクションの形成・活用・継承

8—1　作品の収集

国立美術館の役割を踏まえた質の高いナショナルコレクションの形成を図るため、法人全体の作品収集方針等に基づき、体系的・通史的にバランスの取れた所蔵作品の充実に努めた。また、令和４年度に引き続き、法人予算の重点配分により現代作品の同時代収集を進めた。

作品の収集については、購入以外にも大型コレクションの一括寄贈の受入など寄贈による収集も国立美術館の特徴であり、購入、寄贈を通じてコレクションの充実を図ることができている。

美術史的価値の高い作品や海外流出のおそれがある重要作家の作品収集、ジェンダーバランスや地域の多様性に配慮した収集に努め、国際的に質の高いナショナルコレクションの形成を推進した。

収集点数一覧

館　　名	購入点数	購入金額(円)	寄贈点数	年度末 所蔵作品数	年度末 寄託作品数
東京国立近代美術館	85	540,265,141	29	13,762	251
国立工芸館	26	280,982,000	59	4,159	138
京都国立近代美術館	34	607,127,350	241	13,531	1,600
国立西洋美術館	22	28,811,471	0	6,456	65
国立国際美術館	17	730,952,224	25	8,203	98
合　計	184	2,188,138,186	354	46,111	2,152

映画フィルム

館　　名	購入本数	購入金額(円)	寄贈本数	年度末 所蔵本数	年度末 寄託品本数
国立映画アーカイブ	95	108,659,908	748	87,250	19,322

東京国立近代美術館

〈購入〉

シュルレアリスムを代表する作家の一人マックス・エルンストの油彩《砂漠の花（砂漠のバラ）》（1925年）を購入した。国立美術館全体のコレクションのなかで多様な活用が見込まれる優品である。日本画では速水御舟による画業初期の実験的意欲作《宮津》（1915年）を購入した。近年重点的に取り組む女性作家の作品の充実として、油彩では桂ゆき（ユキ子）《秋》（1955年）、毛利眞美《裸婦（B）》（1957年）、写真では今井壽惠《「オフィリア」その後》（1960年）などを購入し、着実な成果をあげた。同じく近年計画的に取り組む1980〜90年代作品の収集として、油彩では堂本右美《無題》（1990年）、彫刻では日比野克彦《PRESENT BOX》（1982年）、写真では杉本博司〈劇場〉シリーズ（1977〜80年）など重要作家の代表作を購入した。また大正〜昭和を代表する挿絵画家の一人・小村雪岱《邦枝完二著「江戸役者」挿絵》（1932年）や、棟方志功による谷崎潤一郎『鍵』の挿絵版画《鍵板画冊》（1956年）など、美術史上の重要作の購入に成功したことも大きな成果である。

〈寄贈〉

日本画では、いずれも南画系の作品である滝和亭《闔家全慶》（1898年）、水田硯山《瀞峡積翠図》（1927年）をご寄贈いただいた。当館コレクションに不足している傾向の補完となり、戦前の日本画の多様な展開を示すことが可能になった。油彩では、有馬さとえ（三斗枝）《題名不詳》（1946-51年頃）をご寄贈いただいた。戦前から戦後まで息の長い活躍を続けた画家の作品で、近年重点的に取り組む女性作家の作品の充実に合致する収蔵となった。同じく油彩では、横尾忠則《見えざる助力者》（1989年）、《かざぐるま2004》（2004年）を受贈した。また石版による風景画で名高い織田一磨の1910年前後の水彩６点、戦後の木版画界をリードした清宮質文による版画４点、ガラス絵１点も受贈した。横尾、織田、清宮とも既に作品を複数点所蔵する作家ではあるが、今回のご寄贈はコレクションに欠けていた傾向や時代の作品であり、より十全に各作家のキャリア全体を通覧することが可能となった。

マックス・エルンスト《砂漠の花（砂漠のバラ）》
1925年

速水御舟《宮津》1915年

国立工芸館

〈購入〉

板谷波山《彩磁紫陽花模様花瓶》と海野勝珉《花鳥図花瓶》を購入した。明治時代から大正時代の日本の工芸技術の粋を示す優品を収蔵できたことで、国立工芸館のコレクションの欠落を補い、また作品の海外流出を防いだという点でも国立の美術館としての役割を果たした意義のある購入であった。また、現代の美術作品の同時代収集として、加守田章二、樂直入、井上雅之、小川待子、鈴木藏の陶芸作品、池田巖の漆芸作品、四谷シモンの人形など、現代工芸の多彩な様相を示す作品を幅広く収集することができた。さらに特筆すべき点として、新里明士、桑田卓郎、池田晃将、舘鼻則孝など、1970～1980年代生まれの作家の作品を重点的に購入したことも令和５年度の成果として挙げられる。現代的な視点で工芸の分野を新たに切り拓こうとする若い世代の作家にも目配りしつつ、年代、ジャンルともにバランスの取れた収蔵を進めることができた。

〈寄贈〉

まとまった作品受贈として、釜我敏子による日本伝統工芸展出品作の型絵染着物、林康夫の陶磁、山田禮子のジュエリーを収蔵することができた。いずれも1970年代頃から2000年代まで、それぞれの作家の年代ごとの作風の展開をたどることのできる作品がまんべんなく含まれており、コレクションに厚みを持たせることができた。また、加藤清之の作風をよく示す代表作の《WORK 72-X》や、富本憲吉の《鉄描銅彩大和風景模様大飾皿》などコレクションの欠落を補う作品を受贈することができた。さらに松田権六の書簡を受け入れることができたが、国立工芸館内に移築された松田権六の工房での展示を充実させるとともに、制作工程を示す貴重な資料として今後の研究に寄与することも期待される。

板谷波山《彩磁紫陽花模様花瓶》1915年
撮影：エス・アンド・ティ フォト

新里明士《光器》2022年
撮影：エス・アンド・ティ フォト

京都国立近代美術館

〈購入〉

特別購入予算でキュビスムの世界的展開に重要な役割を果たしたアルベール・グレーズの《キュビスム的風景、木と川》(1914年)と第2回国画創作協会展出品作である野長瀬晩花の《休み時》(1919年)を購入した。前者は来歴上ドイツとの関わりが深いため、京都国立近代美術館が所蔵する村山知義などの前衛絵画との比較研究に寄与することが、長らく所在不明であった後者は、確認できる作品点数が少ない晩花の代表作として今後の晩花そして国画創作協会研究に資することが期待される。また展覧会活動と連動した購入の事例として、京都国立近代美術館の「現代美術の動向展」出品作であり、「Re: スタートライン」展でも展示された松本陽子《作品 V》(1965年)や八田豊《作品 65-BB(トロンロン)》(1965年)ほかが挙げられる。加えて、コレクションにおけるジェンダーバランスの是正や中堅・若手作家作品の充実化を目指すため、AKI INOMATA(1983年生まれ)の写真・彫刻・映像からなる〈やどかりに「やど」をわたしてみる〉シリーズを購入したが、この作品群は、令和6年度開催の「LOVE ファッション—私を着がえるとき」展への出品を予定している。

〈寄贈〉

多彩なジャンルの作品を数多く受贈することができた。代表的な事例を挙げれば、昭和の京都における洋画・デザイン・美術教育の指導者として活躍し、関西美術院理事長も務めた霜鳥之彦の滞米作《ウッズホール海洋生物学研究所》(1906年)を含む油彩画7点、水彩画23点の受贈は、今後の京都における近代洋画研究に資することが期待される。またご遺族から寄贈された版画家黒崎彰の《我らを憐れみたまえ》(1965年)に始まる作品計65点は、1960年代以降関西を拠点に活躍した黒崎の制作の全貌を示すコレクションとして、今後の活用が期待される。さらに友禅の人間国宝として活躍した染織家森口華弘の日本伝統工芸展への出品作を中心とした全生涯にわたる作品・資料群計87点を、息子で同じく友禅の人間国宝である森口邦彦氏より受贈した。上記の他にも、女性の陶芸家として先駆的役割を果たした坪井明日香の作品5点や津田信夫の金工作品2点、来野月乙や三橋遵の染織作品などを受贈し工芸コレクションの充実化を図った。また「Re: スタートライン」展出品作家については、購入のみならず、寄贈の申出も多数寄せられ、展覧会開催や日頃の活動などを通じて、作家や作家遺族と信頼関係を構築することの重要性を改めて認識することになった。

アルベール・グレーズ《キュビスム的風景、木と川》1914年
撮影:守屋友樹

野長瀬晩花《休み時》1919年
撮影:今村裕司

国立映画アーカイブ

〈購入〉

上映企画に伴う映画フィルム購入に関しては、「逝ける映画人を偲んで 2021-2022」に伴い、『精霊のささやき』(1987年)等19作品、20本のフィルムと、『生態系-29-密度 3』(2021年)等７作品のデジタル上映用及び保存用素材を、また、「月丘夢路 井上梅次 100年祭」に伴い、『火の鳥』(1956年)等４作品、６本のフィルムを購入することができた。また「アニメーション作家 山村浩二」に伴い、『カフカ 田舎医者』(2007年)１作品、１本のフィルムと、『台所会議』(1979年)等16作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入することができた。さらに「日本の女性映画人(2)――1970-1980年代」に伴い、『病院はきらいだ』(1991年、時枝俊江監督)等14作品、14本のフィルムと、『わらじ片っぽ』(1976年)等３作品のデジタル上映用及び保存用素材を購入し、コレクションに欠落していた重要作を収集することができた。その他、青山真治監督の『EUREKA』(2000年)や野田真吉監督の『京浜労仂者 1953』(1953年)及び『松川事件 真実は壁を透して』(1954年)についても、非常に意義のある購入だった。

〈寄贈〉

映画フィルムの寄贈受け入れ本数は、748本、42件だった。特徴は３点挙げられる。１点目は、令和４年度に引き続き、独立系映画製作会社や個人からの原版寄贈が多くみられた。２点目として、1970年代以降の日本のドキュメンタリー映画に重要な足跡を残した作家の多くの作品の著作権を継承するPalabra 株式会社から、『水俣―患者さんとその世界―』(1973年、土本典昭監督)等の重要作の原版寄贈を受けた。３点目として、東映株式会社から、1947～59年の会社創立初期に東映(東横映画時代を含む)が製作した110作品(225本)の原版寄贈を受けた。時代を代表する数々の東映作品の原版を所蔵するに至ったことは、国立の映画保存機関として大きな一歩と言える。

映画関連資料については、日本映画に関わるものを中心に、作品レベルでの網羅性を向上させるとともに、映画史の調査研究に資する幅広い種類の資料の収集を行っており、令和５年度も映画会社・個人などから多くの資料寄贈を受けた。令和５年度に収蔵した主要な寄贈資料としては、有限会社和田誠事務所より受領したポスター、スチル写真など和田誠旧蔵品約4,000点が挙げられる。

『わらじ片っぽ』(1976年、鷲樹丸監督)

『京浜労仂者 1953』(1953年、野田真吉監督)

国立西洋美術館

〈購入〉

令和５年度は国立西洋美術館の収集方針に則って購入を行った。ジョヴァンニ・セガンティーニの《花野に眠る少女》は半世紀以上にわたり国立西洋美術館に寄託されてきたもので、旧松方コレクションのなかでも近代イタリア美術というやや珍しい作品を購入できたことは、松方コレクションの再構成をするうえで有意義な購入であった。レンブラントの版画、そしてレンブラントの技法を学んだイタリアのカスティリオーネの版画を購入したことは、17世紀の重要な版画家の作品を収蔵したということにとどまらず、17世紀の西洋版画史における南北交流をコレクションによって見せることができるようになった点においても重要である。

ジョヴァンニ・セガンティーニ《花野に眠る少女》
1884-1885年

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン《放蕩息子の帰還》1636年

国立国際美術館

〈購入〉

ルイーズ・ブルジョワ《カップル》(1996年)、レオノール・アントゥネスの作品３点(《道子 #6》(2023年)ほか２点)を購入し、立体作品を手掛ける女性作家の代表的な作例を収蔵することができた。また、国内外で高く評価される田中功起の初期を代表するシングルチャンネル映像作品、類例のないセルフ・ポートレイト写真で世界的に活躍する片山真理の作品、アジア地域で高く評価される樫木知子の絵画など、女性作家の作品をはじめ、収集方針に基づき多岐にわたるジャンルを積極的に収集した。その他、カンボジア出身のクゥワイ・サムナンの映像インスタレーションなど、地域の多様性にも配慮する作品収集を実施するなど、収集方針に基づいた作家・作品選定を行なった。

〈寄贈〉

竹村京の「修復シリーズ」を13点受贈した。また、関西で活躍する若手の画家、谷原菜摘子の作品は、購入作品とは異なるタイプの絵画について寄贈を受けた。さらに、関西ニューウェーブの作家のひとりである山崎亨の彫刻作品、及び1980年代以後の絵画の動向を検証するうえで重要な片山雅史の初期の代表作については、いずれも作家から寄贈の申し出があり受け入れた。上記の他にも、戦後関西の現代美術史においてパンリアル美術協会結成などの重要な役割を果たした日本画家の不動茂弥は、遺族から寄贈の申し出を受けて、関西の複数の美術館により調査・選別が行われ、受贈した。

レオノール・アントゥネス《道子 #6》2023年
Photo by Nick Ash

竹村京《修復された青と黄色に包まれたグラス》
2008年
撮影：福永一夫

8—2　所蔵作品の修理・修復

館　　名	点数	主な修復作品
東京国立近代美術館	83	遠藤利克《欲動—近代・身体》(1997年)
国立工芸館	23	稲垣稔次郎《紙本型 絵染額面 代かき》(1961年頃)
京都国立近代美術館	6	山鹿清華《冷蔵果》(1932年)《蛮布》(1942年)
国立西洋美術館	128	ルドヴィーコ・カラッチ《ダリウスの家族》(1591-1592年頃)
国立国際美術館	55	アンゼルム・キーファー《星空》(1995年)

(単位：本)

館名	修復作品総数	デジタル復元	ノイズリダクション等	不燃化作　業	映画フィルム洗浄	主な修復フィルム
国立映画アーカイブ	46	2	8	6	30	『父ありき』(小津安二郎監督、1942年)、『五郎正宗孝子伝』(吉野二郎監督、1915年)

8—3　所蔵作品の貸与

美術作品の貸与等

館　　名	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
東京国立近代美術館	77	306	184	340
国立工芸館	13	158	27	47
京都国立近代美術館	54	1,063	83	160
国立西洋美術館	9	100	64	86
国立国際美術館	18	55	31	86
合　計	171	1,682	389	719

写真作品閲覧制度(プリントスタディ)

東京国立近代美術館では所蔵する写真作品を、申込制によって個別に閲覧できる制度を実施した。

館　　名	利用件数	閲覧者数	閲覧作品数
東京国立近代美術館	4(1)	5(2)	130(43)

注　( )内は無償対応の数。

映画フィルムの貸与等

館　　名	貸出		特別映写観覧		複製利用	
	件数	本数	件数	本数	件数	本数
国立映画アーカイブ	73	132	49	156	70	181

映画関連資料の貸与等

館　　名	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
国立映画アーカイブ	9	161	48	766

9 ナショナルセンターとしての活動

9―1　国内外の美術館等との連携・協力等

各館とも展覧会の開催に合わせたシンポジウム、研究会、講演会等の開催や、国際会議への出席等を通じて人的ネットワークの構築を積極的に行った。国立映画アーカイブでは国内外の機関で共催事業、巡回上映事業、映画団体とのセミナーなどを積極的に開催した。国立アートリサーチセンターにおいては、国内外の美術館等との連携・協力の下、シンポジウムやワークショップ、巡回展の開催、各種データベースの運用及び国際発信、現代美術等国際展に出展する作家の支援など積極的に取り組んだ。

また、国立美術館研究員を含む日本の美術専門家を韓国（韓国国立現代美術館等）に19人、カナダ・米国（ナショナル・ギャラリー・オブ・アート（ワシントンD.C.）等）に11人派遣し、現地の美術館を視察するとともに現地の専門家とのネットワークを構築した。

国立映画アーカイブにおいては、令和５年度よりプログラムディレクター（PD）、プログラムオフィサー（PO）を配置し、独立行政法人日本芸術文化振興会のアーツカウンシル機能と連携し、助成システムの改善等に協力するとともに、全国のフィルムコミッションと連携した「全国ロケーションデータベース」の運用、ならびに非フィルム資料のアーカイブ化に関する取組（令和５年度文化庁から移管）を開始した。

国内外の研究者の招へいによるシンポジウムの開催等

館　　名	所蔵作品等に関する セミナー・シンポジウムの開催回数	国内外の研究者の招へい等に基づく セミナー・シンポジウムの開催回数
国立アートリサーチセンター	―	11
東京国立近代美術館	4	1
国立工芸館	0	6
京都国立近代美術館	0	10
国立映画アーカイブ	3	5
国立西洋美術館	1	1
国立国際美術館	1	4
国立新美術館	―	14
合　計	9	52

企画展・上映会等の共同主催と共同研究

館　　名	共同主催件数	共同研究件数
東京国立近代美術館	2	2
国立工芸館	3	3
京都国立近代美術館	4	4
国立映画アーカイブ	9	9
国立西洋美術館	―	2
国立国際美術館	2	2
国立新美術館	5	5
合　計	25	27

国内外美術関係者向けワークショップ等の開催

	ワークショップ等タイトル	開催日	全参加者数	うち海外からの参加者
1	「蔡國強　宇宙遊 ―〈原初火球〉から始まる」 開幕記念　トークセッション『〈原初火球〉再考』	令和5年6月29日	263	1
2	共創フォーラムVol.1　Art, Health & Wellbeing ミュージアムで幸せになる。英国編	令和5年10月8日	804	4
3	共創フォーラムワークショップ	令和5年10月9日	55	4
4	文化財修復処置に関するワークショップ ーナノセルロースの利用について　実技フォローアップー	令和5年10月11日	11	1
5	文化財修復処置に関するワークショップ ーモジュラー・クリーニング・プログラムの利用についてー	令和5年10月25～27日	22	1
6	講演会「近現代美術の保存修復ージャクソン・ポロック作品の事例からー」	令和5年10月28日	93	1
7	国立アートリサーチセンター設立記念シンポジウム 「ナショナル・アートミュージアムのいま」	令和5年11月26日	178	5
8	東京大学駒場博物館 特別講義「大ガラス」	令和6年1月18日	44	2
9	「大ガラス東京ヴァージョン」ワークショップ	令和6年1月20日	37	2
10	NCAR国際ワークショップ2023 「美術館とリサーチ｜アートを“深める”とは？」	令和6年3月21、23日	79	9
11	NCAR国際シンポジウム2023 「美術館とリサーチ｜アートを“深める”とは？」	令和6年3月22日	152	4

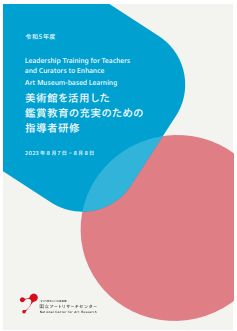
注　参加者数は海外からの招へい者数と聴講者数の合計。海外からの参加者数は全参加者数のうちの招へい者数を指す。

9―2　美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施

国立美術館は、美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施している。同研修は、学校や美術館で鑑賞教育に携わる教員、学芸員に対して実践的な研修を行うもので、修了者が研修の成果を各地域の学校等、現場で実践することで、鑑賞教育の充実を図っている。各地域の学校と美術館との連携強化を図るとともに、全国の児童・生徒に対する鑑賞教育の充実に貢献している。18年目となる「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を４年ぶりに関西で開催し、77名が修了した。同研修のグループワークでは従来の小学校、中学校、高等学校のグループに加え新たに特別支援教育をテーマにしたグループを作り、障害の種類、度合が様々な児童・生徒に対してどのような鑑賞や授業ができるのか、参加者同士で議論を深めた。また、本研修を記録した報告書をリニューアルし、ウェブサイトで公開した。

・修了者数：77名（小学校教諭14名、中学校教諭15名、高等学校教諭９名、特別支援学校教諭８名、指導主事８名、学芸員23名）
・会　　期：令和５年８月７日(月)、８月８日(火)
・参加者の満足度：100%（目標：98.8%）
・Web報告書：https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/learning/post2023-385.html

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修



「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」報告書

9―3　キュレーター研修、インターンシップ、博物館実習

公私立美術館の学芸担当職員の専門知識の向上等を図ることを目的とした「キュレーター研修」を実施した。また、インターンシップ、博物館実習を実施した。

館　　名	キュレーター研修 受入人数	インターンシップ 受入人数	博物館実習 受入人数
東京国立近代美術館	4	5	―
国立工芸館	0	1	―
京都国立近代美術館	2	2	―
国立映画アーカイブ	―	1	12
国立西洋美術館	4	3	―
国立国際美術館	2	5	―
国立新美術館	―	7	―
合　計	12	24	12

9―4　アートカード・セット

国立アートリサーチセンターでは、「国立美術館アートカード・セット」を直接貸し出しができるよう、ウェブサイトに申込フォームを設定し、全国の小・中学校、高等学校及び大学に対し国立美術館の所蔵作品による鑑賞教材「アートカード・セット」の貸出しを行った。美術館訪問にあたっての事前授業等に使用する場合は各美術館から貸し出しを行った。（東京国立近代美術館（本館）15件108セット、京都国立近代美術館1件11セット、国立西洋美術館3件27セット、国立国際美術館10件72セット）

国立美術館アートカード・セット

10

決算報告

（単位：百万円）

	予算金額	決算金額	増△減額
収入			
運営費交付金	7,739	7,739	―
展示事業等収入	1,504	1,853	349
施設整備費補助金	400	920	520
文化芸術振興費補助金	―	4	4
受託収入	―	101	101
寄附金収入	650	769	119
合　計	10,293	11,386	1,093
支出			
運営事業費	9,243	9,347	△104
管理部門経費			
うち人件費	1,246	1,285	△39
うち一般管理費	804	1,004	△199
事業部門経費	7,193	7,058	135
うち美術振興事業費	3,865	2,981	885
うちナショナルコレクション形成・継承事業費	2,484	2,538	△55
うちナショナルセンター事業費	844	1,539	△696
施設整備費	400	920	△520
文化芸術振興費	―	4	△4
受託事業費	―	101	△101
寄附金事業費	650	577	73
合　計	10,293	10,949	△656
収支差引	0	437	437

注　金額は単位未満四捨五入のため、合計が合致しない場合がある。

11 会員制度等

MOMATサポーターズ（友の会）

館　　名	年度末会員数計
東京国立近代美術館	663

賛助会員

館　　名	個人会員	維持会員	特別会員	一般会員	プレミアム会員	年度末会員数計
東京国立近代美術館	214	21	14		2	251
京都国立近代美術館	62		1	6		69
国立国際美術館			4	7		11

MOMAT支援サークル

館　　名	プラチナパートナー	ゴールドパートナー	シルバーパートナー	年度末会員数計
東京国立近代美術館	3	5	9	17

OKパスポート

館　　名	ミュージアムパス	コレクションパス	合　　計
京都国立近代美術館	323	7	330
国立国際美術館	297	3	300

キャンパスメンバーズ

国立美術館全体の事業として平成18年12月から実施している、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、令和５年度は７校の新規加盟があり、合計106校となった。これは制度開始以来最高の加盟校数である。（利用者数129,117人）平成29年度から実施している外部媒体（マイナビ「学生の窓口」）を活用した広報では、「“魅力”を身につけるのに最適なのは『美術館』だった!? 先輩に学ぶ感性の磨き方」と題した記事を掲載し、学生に対する広報活動を引き続き強化した。同記事は、令和４年度のページビュー数10,643回を上回る11,807回閲覧された。

入会校数	利用者数
106学校・法人	129,117

キャンパスメンバーズ特設サイトURL：https://www.campusmembers.jp/

12

名簿

令和６年３月31日現在

役員等	理事長・国立新美術館長	逢坂　恵理子
	理事・国立西洋美術館長	田中　正之
	理事・本部事務局長	石﨑　宏明
	理事	渡部　葉子
	監事	田中　　淳
	監事	茶田　佳世子
	東京国立近代美術館長	小松　弥生
	国立工芸館長	唐澤　昌宏
	京都国立近代美術館長	福永　　治
	国立映画アーカイブ館長	岡島　尚志
	国立国際美術館長	島　　敦彦
	国立アートリサーチセンター長	片岡　真実

運営委員	今橋　映子	（東京大学大学院総合文化研究科教授）
	内田　篤呉	（MOA美術館長）
	篠原　資明	（京都大学名誉教授）
	島谷　弘幸	（独立行政法人国立文化財機構理事長、皇居三の丸尚蔵館長）
	田端　一恵	（社会福祉法人グロー東近江障害施設群総合施設長）
	柄　　博子	（東京外国語大学監事）
	冨田　　章	（東京ステーションギャラリー館長）
	仲町　啓子	（実践女子大学名誉教授、秋田県立近代美術館特任館長）
	樋田　豊次郎	（美術史家）
	平野　共余子	（映画史家）
	松本　正道	（アテネ・フランセ文化事業株式会社代表取締役）
	森迫　清貴	（京都工芸繊維大学長）
	矢ヶ崎　紀子	（東京女子大学副学長、現代教養学部国際社会学科教授）
外部評価委員	岡田　温司	（京都大学名誉教授、京都精華大学大学院特任教授）
	熊倉　純子	（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）
	黒川　廣子	（東京藝術大学大学美術館長）
	深井　晃子	（公益財団法人京都服飾文化研究財団理事／名誉キュレーター）
	宮澤　誠一	（日本大学名誉教授）
	湯浅　真奈美	（ブリティッシュ・カウンシル東アジア地域アーツ部門ディレクター）

独立行政法人国立美術館本部事務局

東京国立近代美術館内
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL：03-3214-2561
FAX：03-2314-2577
URL：https://www.artmuseums.go.jp/

各種報告書等リンク先　https://www.artmuseums.go.jp/corporate_info/gyoumu/houkoku

ISSN 2189-8065

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。